
Destiny IN Magister Negi Magi **第一部らしいですよ？**

黒灰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fate/Distorted Destiny IN Magister Negi Magi 第一部らしいですよ？

【Nコード】

N7189V

【作者名】

黒灰

【あらすじ】

衛宮さんがネギま！世界にログインしました。

やって来た時期が時期だったり頑張り過ぎだったりでネギ君の人生難易度UltraHardになったのはご愛嬌。

「大罪」とは？なぜ衛宮さんのせいでUltraHardに？超・鈴音を更に追い込む強迫観念とは？

何はともあれ、

全て、衛宮さんのせいです

最初の一步と大遭難

空に向かって落ちる。

理への反逆。

時逆さに動き、リングは宙へと舞い上がる。

そしてこの身を腐らせるはずの時間は、逆流した。

逆巻く流れに身を任せ、流れ着くのを待つ。

世界漂流者は時間の旅にも出るか？

議論の価値 あり／なし

A．あり

――――
衛宮士郎は流れた。

時のポロロッカに身を任せた。

それは無自覚ではあったが、自覚していたことも他にあった。

自己の存在世界がズレた。

正確には平行移動した。

そして衛宮士郎は晴れて完全逃亡を果たしたのであった。

ちなみに、さようならとかありがとうと言う両親も居ないし、

周りに色々親しい人が現れておめでとうの嵐とかそっいうこともない。

逃亡イクナイ。

衛宮士郎を追う団体・集団は3つ。

一つ、魔術協会。

一つ、聖堂教会。

一つ、助けられ人。

理由としては、モルモット確保・秘匿義務破りに対する仕置、異端審問、色々あって紆余曲折の逆恨みとありがた迷惑への復讐、などがある。

何を持って3つの団体から逃げたとするか。

一つ、そもそもこの世界にはこれらの団体が存在しないということ。
一つ、恨まれる理由となる行動がまだ為されていないということ。
一つ、追ってこれる人間が居ないということ。

衛宮士郎はこの世界において、不審にして潔白だった。

そして不可解にして不条理に現れたために、不都合な真実を覆い隠して生きるコトを強いられた。

筈だった。

しかし英雄は自重しない。

不可解だと思われるには情報網が発達しておらず、不条理な登場だと思われるには神の御使を信じる人間が多く、
不都合な真実はおそらくは誰も気にしないのだから。

今や時代は16世紀。

戦いは掃いて捨てる程のこの時代。
衛宮士郎の巡礼が始まる。

進路が大幅に変わるとは、本人も予想していなかったが。
きっかけは、そう。

彼女と出会った、ある春の黄昏時

「合法口り発見の巻から始まる」

「あ？何を言っている士郎？」

「まあこれから始まるんじゃないよ」
「何故爺口調・・・？」

とある西洋の不老少女（前書き）

前に書いた奴はぶん投げた。

それでいい、そのままでもいい。

ぶん投げたって、間違いなんかじゃないんだから

！

とある西洋の不老少女

流れ続ける衛宮・士郎。

戦いは繰り返された。

彼の行処が血が流れる。

否、彼は血の舞台へと足を運ぶ。

それ以上血が流れぬように。

そう願って生きてきたのだから。

バカは死んでも治らない

議論の価値

あり／なし

A．なし

彼が彼女と出会ったのは偶然だった。

というより出会ったとすら言えない。

彼はただ彼女を街の片隅で見かけただけで、

彼女は彼を視界に収めることも無かった。

だが、正義の味方モドキの眼に映るその姿は、

あまりに儚く、美しかった。

「俺はロリコンじゃない。確かにあの時ドキドキしたのは間違いない、今もちょっとドキドキしてる、けど俺は違う」

彼女はまるでフランス人形。

衛宮・士郎は彼女限定ロリコンになった。

嘘だけど。

彼女は人形劇をしている。

糸を巧みに操り、往来の人々を楽しませる。

躍動に富んだ動き、まるで魔法でも使っているような。

2つの人形を花のような笑顔で踊らせている。

だが、その軽やかなステップを編み出す少女の眼は、

諦観と悲観。それに溺れ死んでいた。

……ああ、だからか。成程、確かにまるで人形だ

世界の風という奴に削られて摩耗していた。だからそれを隠すような笑みは貼り付けられた肖像画。

ガラクタ染みた笑顔。恐らく、嘗てそうやって笑っていたのだろう。懐かしい記憶を掘り出して再現したのだろう、贋物の表情。

明日の自分にすら希望を持てなくなった、答えを見失った哀れな冤罪被害者。

だが、正義の味方は手を伸ばさなかった。

……おそらく有りふれたことなんだろう。彼女は特別ではない。

そして、これからもこうやって生きていくんだろう。

こういう眼をさせないために戦う。いつもの事だ。

ただ彼の決意が強まるだけの出来事。

その時だけなら。

だが、これより数日。

その出来事は別の、大きな意味を放つことになる。

時は16世紀初頭。

魔女狩り最盛期の幕開けでもある。

この仏蘭西の片田舎でも魔女狩りは行われた。

春の仏蘭西のとある街で大規模な処刑があった。

この数日なぜか見かけなかったあの少女が火にくべられようとして
いる。

衛宮・士郎は驚愕した。

「……………あの子は、魔女なのか」

「そうさ、2年くらい前からこの辺りをぶらついてた子なんだが、
歳を取らないわ、魔法みたいに人形を動かすわで、まさに魔女だよ、
間違いない。しかもあの魔女は今までに何度も魔女だと疑われたん
だとき。しかも、顔を覚えている教会の騎士が居たらしい。何と、

15年前と10年前にあの魔女によく似た金髪の少女
を見たらしい。その時から疑っていたんだとき。これは間違いない
だろうね、大魔女だよあれは」

「……………そんな」

……………それだけであの子は死ぬのだ。
似ているだけかも知れないじゃないか。

時は16世紀初頭。

それだけであの子が死ぬ時代。

士郎は呆然としていた。

そして、あの子は磔にされて、ついに火を焚かれた。

その時に苦笑いを浮かべた少女が見えた。

錯覚ではない。

俯いた顔は太陽に照らされて逆に陰って見えるが、見えた。

諦めた。悲観だ。彼女の心からの表情が見えた。

瞬間、バカが飛び出した。

……時代が何だ、こんな時に困った人を放っておくなんて出来るか！

士郎がこの世界の「裏」で戦うようになってから、2、3年。
その中で非常識な移動方法を見た。
「瞬動」だ。

この世界では「気」と「魔力」の二種類の力が存在する。
双方は反発し、同時運用は不可能という。

今まで居た世界とは全く違う道理のもとに存在する力。

回路の「魔力」とこの世界一般に言われる「魔力」は違う。

オド
マナ
小源と大源。

この世界はマナ魔力で奇蹟を起こす。

起きる奇蹟も趣を全く異にする。

派手だ。

とにかく派手なのだ。自分の知る魔術と比べて。

光線は飛んで来るわ、氷の礫が雨霰だわ、とにかくド派手だ。

それと別に、士郎は気の扱いも少しは覚えた。

コチラは生命から生まれる力。コレも小源に分類出来るだろうか。

しかしコチラはオド魔力と違い、毒にならない。

魔術回路は神秘を執行する器官だ。

だが同時に毒袋でもある。

それと別なのだ。

……ものは試し、というやつだ。

ある日、士郎は回路を走らせながら気を発してみた。

反発はしない。

恐らく生命力同士で親和力があるのだろう。

それと別に、回路を走らせながら魔力を集中。

こちらと同じ。

神秘の行使力という点が共通するからだろうか。

更に、魔力・気・回路魔力を同時に行使すると、やはり反発した。
中間材としての役目を果たすわけではないようだ。

それはともかく、

必要だったから覚えた。魔法の力を。

そうしなければ魔獣や「悪い」魔術師と戦えないのだ。

自分の「魔術」をおおっぴらに使うわけには行かなかった。
今度はうまくやる。

その決意も以って第2の世界で戦うと決めたのだから。

士郎は飛び出して、すぐに足に魔力を集中させる。

補助魔法は必要ない。いや、その時間すら惜しいのだ。

彼女がこれ以上傷つかないように、急ぐ。

距離は残り50m余りか。

しかもあの場は群衆、警吏、教会騎士で囲まれている。

だが、10秒もかけるつもりはない。

5秒だ。

5秒あれば十分だ。

それを可能とする術が有るのだから

！

……こんな所で死なせたくない！

「同調・開始！」

撃鉄を降ろせ。自分の信頼する力も加えろ。

信じる力が、実現する力だ。

回路が回り出す。

力は更に身体を巡る。

その力を足の裏に集中させ、

瞬動！

一度目。

人混みの無い一つのラインが観える。

そこを突き抜けて、距離を詰める。

紅い閃光が疾った。

縮めた距離は20 m。

減った時間は0.75秒。

目の前は蟻一匹通さぬ構えで十字架を囲む教会騎士とその取り巻きとなる200もの雑兵。

あの少女を恐れているのだろう。ある程度距離を取って囲んでいるのはそういう意図もあるのか。

そして構えられたのはバイク。針山だ。

……堅固な守りだな……。これを轢き倒すのは骨だ！

だから、2度目は。

宙に跳ぶ。

高さは3 m弱。

コレでは槍の針山を超えられない。

20 cm落下する前に、

虚空瞬動！

空を蹴って更に上方・前方へ。
これで高さは7mを確保した。
5mほど下方か。

十字架の彼女の高さはそこだ。

まだ火は届いていない。

そろそろ得物を準備しなければ。

「投影・開始！」

用意するのは決まっている。

弓と矢だ。

詰めた距離は7m。

費やした時間は1・50秒。

3度目。

動揺で騎士達は動けない。どよめきの始まりすらまだ聞こえない。

……大丈夫だ。このまま逃げきるまで恐らくマトモに行動出来まい。

虚空瞬動！

さらに15m距離が詰まる。

5秒経過するまでまだ2秒弱残っている。

槍兵の構えは越えている。

……今だ！

神速で弓に矢を番え、拘束部分を剥ぎ落とすように縄を撃ち抜く。

右肩の直上を、右脇の傍を、そして最後に右膝の傍。

金髪の少女の戒めは解き放たれた。

4度目。

虚空瞬動！

……彼女が火に落ちる前に抱き留めてそのまま抱えて逃げる！
それで終わりだ。

5秒強の時点で衛宮・士郎が少女を抱えた。

少女は初めてその時、士郎の姿を視界に収めた。

「え？」

自身が助けられたことは愚か、何かが起きていたことすら気づいていなかった。

そんな彼女の驚愕も無視して士郎は再び跳んだ。

虚空瞬動！

礫状態の彼女の左側面を太陽が照らしていた筈だった。

だが、今、彼女の顔の右半分が照らされている。

少女を抱えて士郎は太陽に向かって走り出していた。

「お、お前、一体何を」

「助けた以外のどう見えるって言うんだ！」

「いや、何故助けた!？」

「決まってるだろ!？辛そうな顔をしてた、困った女の子を放って置けるか！」

「んな……!？」

「……馬鹿か!？そんなことで魔女を助けるのかこの馬鹿は!？」

「馬鹿か!？」

「ああ、馬鹿だ！正義の味方になんてなろうとする馬

鹿だ！でもそれに憧れてしまった！後悔もない！」

「魔女を助ける正義の味方がどこに居」

「此処だ！君の目の前のこの馬鹿がそうだ！」

「……眩しすぎる。毒になるくらい、自分を殺してしまいたいそうない。い。」

だから、教えてやらなければ。

「そうか、助けたこと、後悔させてやる。私の名はエヴァンジェリ

ン・A・K・マクダウェル。真祖の吸血鬼、『悪の魔術師さ』

ロリ誘拐！（前書き）

1万字3日で書ける人とかマジ信じらんねえ
具体的にどなたさんとは言いませんが！
痺れて憧れるズエア！

ロリ誘拐！

正午前の平原を太陽の方角に向かって走る男がいる。

紅い外套を纏った風変わりな格好の傭兵だ。

可笑しなことに、その両手には金髪の少女が抱えられていた。
終いには、

「魔女が逃げたぞ

」！

百数十人の兵士に追いかけている。

その可笑しな光景は、『魔女』という単語が聞こえなければ

どう見ても誘拐犯です。本当にありがとうございました

- - - - -

駆け落ちと誘拐と冤罪死刑囚の救出の違い

議論の価値

あり／なし

A．あり

- - - - -
- - - - -
- - - - -

……面妖な術を使って現れたあの男。魔女の下僕に違いはあるまい。
あの男も何としても殺さねばならぬ。あの男もあの少女は魔女で間違いない。という証明になろう。

衛宮・士郎の出現により、エヴァンジェリンの魔女疑惑は確定へと変わった。

これより後、あらゆる街で二人の特徴が出回ることは間違いがなかった。

安寧には程遠い旅が始まる。それが既に此处で決まっていた。

「……エヴァンジェリン？」

「そうだ。この名前、貴様も聞いたことがあるだろうよ。さっきの動き、『瞬動』と『虚空瞬動』だな？お前も『裏』の住人だ。真祖の吸血鬼の名前くらい覚えているだろう」

……確かに、聞き覚えくらいはある。

だが、そういう評価が間違이었다ことは往々にしてあるし、実例をまず知っている。

士郎はある反英雄を思い浮かべる。

……アイツの眼だ。この子の眼は、それに何処か似ている。

裏切りの魔女。

ありとあらゆるものを裏切った魔女として悪名高いあの女性。

コルキスのメディア。

ギリシャの神代の魔女。

……実際は相当苦勞人だったわけなんだけどなあ……………

そう、裏切りの魔女は裏切られた少女でもあった。

ひたすらに騙され、その結果磨耗した。

だがたった一つの願いが残っていたのだ。

わたしはただ、帰りたいのです

そう願って参戦した彼女。
そして願いは遂には叶わなかった。
聖杯は誰のものにも成らなかった。
だが、彼女は恐らく幸福だっただろう。

一時の黄泉帰りの中でその願いに変わるものを見つけた。

葛木・宗一郎。

彼こそが彼女の聖杯。

寄る辺。

愛する人。

「……ああ、確かに知っているよ。でも、だから何だ？」

「……は！？」

「俺はそういう評判をあまり宛にしない。経験則上」

「……本当にコイツは正気なのか！？」

「……単にお前がそういう人間だと言いたいだけじゃないのか？」

「そういうわけじゃない。本当に知り合いにそういう奴がいたんだ。で、君はそういう類の人間の目をしているように見えたが？」

「で、という奴だ。私は、という奴だと言っただけ」

「騙された女の子、って感じか？しかも報われない」

「……ッ」

「……そんな生易しい言い方で表せるか！だが……」

「当たりダぜ、ゴ主人。認メロヨ？」

「チャチャゼロ……」

影の中から一つの人形が這い出して、並んで飛行を始めた。

「リビング・ドール 生きた人形か？」

「オウ、幼女趣味デ魔女ノ騎士気取り野郎。オレハチャチャゼロッ

テモンダ。真祖ノ吸血鬼ニシテ悪ノ魔術師エヴァンジェリンノ第一従者ダ。才前、見ル目有ルナ。幼女趣味ノ病氣持チダケドヨ、ケケケ

「病氣じゃない。ドキドキしただけだ。少し」

「知ッテツカ？ソレ病氣ツツーンドヨ」

「違う！間違ひなんかじゃない！」

「病人ト酔ッパライハ良クソウ言ウケドヨ、ケケケ」

「こいつ……！！人を幼女幼女言いよって……！！」

チャチャゼロの言葉のナイフは過たず士郎の心の核を穿ち、

「ぐはっ」

「おい！？」

「ケケケ」

走つていながら、そう呻いてうつぶせに倒れた。

もちろん、エヴァンジェリンは抱えられた両手を頭上に上げられていたせいで傷一つない。

チャチャゼロの飛行も止まり、彼女は浮遊して停止する。

「おい！大丈夫か！？」

「……人を心配するのも久しぶりなんじゃないだろうか？」

言ってからエヴァンジェリンは考える。

そして幼女趣味の紅い傭兵は立ち上がる。

当然、少女を地面に立たせてからだ。

改めて抱え直して走りだすと、

「大丈夫だ。問題ない」

と返事を返した。

「色々性癖に問題があったようだが大丈夫か……！！？」

「君を抱えて逃げるくらいは出来る！安心してくれ！」

「幼女抱えて逃げる人間が言つと本当に病氣に聞こえるぞ！？」

「病氣じゃない！」

「生真面目な病人はそうやって誤魔化してぶっ倒れて死ぬんだ！お前もそういう類の人間だ！人の心配を考えると……」

「大丈夫だ！俺なんか心配するな！」

……あれ！？重病人をベッドに押し留めるような文句になってないか！？

いや重病人だけど！？性癖的に！

エヴァンジェリンの思考回路は今や混乱で自失の状態にあった。

「ゴ主人、才前バカダナー。バカナ会話二乗セラレチマツテヨ」

「うるさいボケ人形！」

「病気じゃない！」

「黙れ病人！」

「ケケケ、幼女ガ怒ルトソイツ興奮シテモット病気が進行スルゼ。

ゴ主人無情ダナー」

「幼女幼女言うなあー！」

そうやって騒いでいるものの、一向に兵士は追いついてこない。それもそのはず。

衛宮・士郎はこんな会話をしながら瞬動で移動しているのだ。

常人はその動きの軌跡すら捉えられない。

かくして、二人と一体の逃避行が始まった。

君が嫌と言っても君を奪っていくでおじやる(前書き)

それ、ただの誘拐ですよ。

君が嫌と言っても君を奪っていくでおじやる

お約束ながら隠れるのは森の中だ。

走りだしたときには昼前、撒いたことを確認したのは昼過ぎ。

そして今はやや夕暮れ。

森の中の少し開けた所で止まった。それまで何故かエヴァンジェリ

ンは抱きかかえられたまま。

彼女は黙って抱かれていた。

士郎も黙して語らず、ただ安全な寢床を探して歩き回っていた。

内心が病気な状態であつたわけでもない。

嘘ではない。

- - - - -

正直アイツはどう見てもロリコンなんだが、そこらへんどうよ？

議論の余地

ある／ない

A．ない

著者注：No , touch ! yes , lolita .

著者注2：小生別にロリコンでは御座らぬ。虹ロリは良き哉良き哉
思うけどよー

- - - - -

紅い男が周りから薪となる枝を集め始めた。

その手際は野営に慣れていることを伺わせる。

陽が沈む前には十分な量を集め終わっており、すぐにキャンプが始まった。

「アイ・アム・ザ・ボーン・オブ・マイ・ソード・火よ灯れ」
アイル・デスカット

呪文が唱えられた。発動媒体は左手の手甲だ。

積み上げられた薪に火が灯ると、士郎は自身の影に手を突っ込み、パンと干し肉を取り出した。

衛宮士郎は食料を、無理やり覚えた影魔法によって作った「倉庫」の中に溜め込んでいた。

……食い扶持は増えたが、しばらくは十分だろう。

取り出した食料を目の前で三角座りでコチラを見ている少女

名は『エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル』、賞金首

の吸血鬼、自分も聞いたことがある
に手渡す。

それを受け取ると、

「毒は入っていないだろうな？」

「入れるか！」

「いや、眠剤か……？」

「君は一体何を考えた！？」

「幼女趣味病人がやることなんぞ知れた事」

「病人じゃない！」

「まあ、関係ないがな。真祖の吸血鬼にはな……」

「」

そう言うと彼女はパンを頬張った。

「話には聞いているよ、それは。それでも毒なんか入れたりしない
って……」

それを見て安心し、士郎もパンに齧り付く。

この時代のフランスのパンは現代よりも黒く硬い。
フランスの小麦粉の粘性の弱い点が原因だ。

そして未だフランスパンと呼ばれる形は現れていない。

原材料はライ麦と大麦。保存が効く、大きい物が多い、という特徴もあった。

ライ麦の酸味が長期間の保存を可能にする、とも言われる。

日持ちはするのだ。だが

「……………硬いぞ」

「すまない、少々日経ちすぎていたかもしれない。パン粥にするか？」

「いや、構わんさ。水は貴重だろう」

「済まないな」

そう言うのと力任せにバリバリと噛み砕き始めた。

少し恥ずかしそうにしているのか、眉間に少々皺がよっている。

「これと乾し肉があるが、それで足りるか？」

「……………足りる。というよりそこまでの施しも要らん」

「そうか、良かった」

その反応を善し、として、士郎はこの後のことを考え始める。

……………勢いで助けたことに後悔はない。

だがこの子は賞金首で、『あちら側』でも名が知られすぎている。恐らくそれを魔女狩りから助けた俺の特徴も広まっていくだろう。

さて……………

士郎のパンを齧る口が止まっていた。

どうやら考え込んでいるようだ。

エヴァンジェリンは士郎をずっと観察していた。

その隣にはチャチャゼロが座っている。

……………この男の人となりはわずかに把握出来た。

馬鹿だ。お人好しだ。恐らくは善人だ。
吸血鬼は傭兵を先ずはそう勘定した。

そして気づいた。

失念していた。まだ名前を聞いていない。

「まだ聞いていないぞ」

そう話しかけると、目の前の男はすぐに思考を止め、少女の言葉に反応した。

「ん？ああ、すまない？何をだ？」

「名前だ。こちらに名乗らせてそちらは何も無しか。いい度胸じゃないか、真祖の吸血鬼を相手にな」

そう凄むと、男は恥ずかしそうにはにかみ、名乗った。

「ああ、済まない。シロウ・エミヤだ」

「真祖の吸血鬼について言うことは無いのか？まあいい……………で、シロウ・エミヤ……………珍しい名前だな」

「俺の生まれは極東だね。東方見聞録って読んだこと有るか？」

「まあ、一応は。あのトンデモ本か」

「いや、実は結構的を射てるんだ、あの本」

「一応聞くが、何故分かる」

「そのトンデモ本に、ジパングって有っただろ？」

「黄金の国、ジパングか。それがどうした？」

「そこだ、俺の生まれは」

「は？」

「実際のところは、黄金なんて限られた場所にしか集まってないけどな？金山は有るにしてもさ」

エヴァンジェリンは沈黙した。

……………まさかそんな馬鹿なことを聞かされるとは思わなかったぞ……………！！？

湧いたのは怒りではなく純粹な驚き、そして呆れと疑問だ。
隣で座る殺人人形もケケケ、と笑ってはいるが多少驚いているよう
だ。

「欧州の生まれでは無いと思っていたが、まさかそんな所からどう
やって

「それにはちよつと事情がある。まだ話せない、かな？」

「私に隠し事か？フン、まあ一応助けられた義理はある。どうせ死
ななかつたがな」

「すまないな。でも、死ぬ死なんなんて関係ないと思う」

「何でだ？」

「焼かれる苦しみは変わらないだろ？」

「……お人好しな奴だなあ……。しかもさっきから言ってるは
ずだが。」

「私は真祖の吸血鬼で魔術師だ。火ぐらい何とでも出来る」

「それでもだ」

「……しかも頑固と来たか。厄介な人間性だな。」

エヴァンジェリンは内心苦笑する。

会話が止まった。

そこで、先程この男が何かを考えている様子だったことを思い出す。
……問うてみるか。

「そういえば、さっき何かを考えている様子だったが？邪魔して悪
かったが」

「いや、構わないよ。名乗らなかつたこっちが悪い。で、何を考え
ていたかつてか？これからのことだよ」

「……これからか。どうせあの街の周りにはもう十年は近づけまい。
このシロウという男はどう考えているのか。
少し、意地悪を言ってみよう。」

「これからか？私の首を引つ掴んで賞金に引き換えに行くか、それか首を斬ってそれを持っていくか、どちらにしようか迷っているのか？ククク」

ロンリーロリ、ロンリーロリが脱ロンリーロリ（前書き）

ロンリーロリはロリコンな方の緑川さんが言ってた。

そして3日で一万字突破したんだがウオイ？
やったね！

ロンリーロリ、ロンリーロリが脱ロンリーロリ

「なんでさ」

ため息を軽く付いて、大の男が拗ねている。

いや、拗ねていることが明確に分かるほどの表情の変化はない。だが確かにこの傭兵は拗ねていた。

だって焚き木に枝を突っ込んでゴソゴソやってるんだもん。
「の」の字ティックに。

いい男が拗ねますと何かその・・・可愛いでしょう!? ね!
? ねえ!?

by 弓野先生

議論の価値

あり／なし

A
あり。

ただ、端的に言つて先生はただ自分の旦那の可愛さを
ペットのごとく褒めちぎっているだけかと判断します。

by
•

あの……恥ずかしいからちよつと自重してくれないかな……？

by 件の旦那

「そんなことをするつもりは無いよ。最初から、今も。ただ」
「ただ？」

「君を守りながら逃げる経路を考えていた」

……助けて終わり、ではないのか？この男。

エヴァンジェリンは疑問を持つ。

「？」

故に彼女の首が傾く。

「これから恐らく追手が付くだろう。一つは魔女狩り側。もう一つは魔術師側だ。

君の目撃情報がこれから広がり始めるはずだ。魔女が逃げたんだからな。しかも下僕と思しき男まで付いたんだ。どちらも警戒を強めるはずだ」

「成程な」

彼女の首が元の角度に戻る。意を得たのだろう。

「そこでだ、この際俺が君を守りながら逃げよう、と」

「いや何でそうなる」

再び20度ほど首が傾き、表情が少々険しくなる。

「どうせ俺は君の新しい従者と見られるだろうからな。傭兵業もこれで店じまいだ。だから」

それに対して紅い男はこんな提案をした。

「君が俺を雇ってもらえないだろうか」

冴えた提案か、戯言か。

それは神のみぞ知る。

「何も払わんぞ？」

「それでいい」

「なら何が望みだ……？」

「ただ君を守ろうと思った、それだけでは不足か？」

「な……！！？おま……！！？」

……まさか本当に幼女趣味を理由に助けようとした病人なのは……
……！！？

久しぶりに恐怖を覚えたぞ……！！？

「眼の前の困った人を先ず助けられずに何が正義の味方だ。俺は、君を助ける」

……良かった！違った！確証はないが！だが……

「……じゃあ何故私なんだ。他の困った人を助けに行け。さあ何処となりとも行け」

「それが君を見捨てる理由になるのか？それは違うと思う」

「むう……私は今まで一人でやってきたしこれからそのつもりだが？不老不死だしな。」

だが「

……譲歩してやるか。しつこい。だが、もう少し意地悪にこう問おう。

「ならば、契約期間は？そちらで指定して構わん。それくらいは付き合ってやらんでもない」。どうせ、しばしの戯れになる」

「ならば君が死ぬまで、でも構わないか？」

そんな問いに対して、意表を付く答えが返ってきた。

「何をそんな馬鹿なことを

」

エヴァンジェリンの訝しみはここで頂点に達する。

「いや、出来るんだ。これが」

だが士郎は真剣な　だが少し笑みも混ざっている

表情

で、しかし軽い口調で語る。

「ホラを吹くのならやめろ。慰めるのならやめろ。騙すのは許さん」
エヴァンジェリンは早口で捲し立て、嘘を責めようとする。

しかし士郎は変わらぬ調子で、

「本当だ。とあるやんごとなきお方、から賜ったある品のせいで不老不死だ。魔力の有る限り、という条件が付くんだがな。君の仲間、と言っているのか」

「何だと」

驚くべきことを告白した。

「経緯は、まだ、言えないけどな」

そして、そんな時に彼女の第一従者はもう寝ていた。

衛宮・士郎の旅路について説明せねばなるまい。元いた世界では、彼は彼を知る者が知る通りに、やはり正義の味方を目指していた。

聖杯戦争を乗り切った。

彼とその従者、そして魔術の師とが乗り越えた。

固い信頼で結ばれた主従・師弟だったと言えよう。

それも戦いの中で築かれたものであり、戦いが育てたものは絆だけではなかった。

彼は、理想を現実にしようと走り出す。その起爆剤を創りだしたのも聖杯戦争だった。

従者は去った。師匠に力を得るために教えを乞った。

師匠に付いて、倫敦にも渡った。

そこで非才ながらも魔術の学びを修めた。

そして、力を手に入れ、飛び出した。

誰も止められなかった。

戦地巡礼^{たたかい}が始まった。

彼は不敗、不退。

その姿を尊く思う人々もあった。
だがついに誰も理解は出来なかった。

その中で自分の行く末にも何となく勘づいていた。
彼の肌は黒ずみ、対象に髪はくすんだ白髪に変わっていた。
纏うのは紅い外套。

．．．．．なんだ、そういうことだったのか。アイツも俺も、
同じだったのか。

士郎はそれに後を押された。
押されてしまい、さらに止まらなくなった。

戦いの結果、怨みを買うこともあり、目を付けられることもあり。
ついに追い詰められた。

彼は瀕死。

隠れたのは良いが、もう逃げ場がない。

ネズミが袋に入っただけだ。

だが、そこに現れた。

魔術使いの先生が現れた。

彼女は腕を組んで怒っていた。呆れていた。諦めていた。

だが、信じていた。彼女自身を。

希望を願っていた。彼の未来に。

だから、彼女は彼を助ける。

「士郎

」

「とおさか．．．．．？」

息は絶え絶え。それでも士郎は目に見えた彼女の名前を呼ばずには
居られなかった。

「これ、預ってきた贈り物。あの子がね、『主人への最後の奉公で
す。王からの餞別、受け取りなさい。もう必要ありませんしね』だ
って」

「え？」

そう言つて彼女は彼にあるモノを埋め込んだ。

アヴァロン
全て遠き理想郷。

そして、魔力の溢れるルビーを彼の口にねじ込んで飲ませた。
魔力が身体に漲ると共に、士郎の傷が忽ち癒えていく。

ソレと共に、何かの情報が流れ込んでいる。

本物だ。俺の投影品にコイツは無いはずだ。

だが……いや……つまり、

しかも何だ？この情報は……剣？剣、剣、剣……

・

「彼女は、元気だったか？それと、この情報は……

……」

「理想郷でのんびりよ、アンタの考えてる通り。衛宮くんの惨状が時計塔の私のところまで聞こえてきてね。呆れたわ、本当に。それでちょっと助けに来てもらおうかと思つて行つただけで断られてね。その代わりだつて、コレ。情報？それもとある馬鹿からの手助けらしいわ。約10年越しの」

「いや、どうやって行つたんだ？それと……馬

鹿？誰だ？」

「そつちはコレ。で、馬鹿は馬鹿よ、知らないわ」

彼女は笑つてあるモノを取り出す。

そこにあつたのは万華鏡。

万華鏡の短剣。

「！じゃあ……」

第二魔法「並行世界の運営」。

その力の体現、宝石剣。

彼女がそれを手にしている。それが意味するところはただ一つ。

「そうよ、至ったわ。アンタが三途の川の間こう側なんてところに至る前にね。その応用でチヨチヨイよ。言うほど簡単では無かったんだけどね……！」

「……すまん」

「ありがとう、よ。士郎。これから誉れ高い若き『魔法使い』がアンタを救済してやろうってんだから感謝しなさい、謝る前に」

「すま……ありがとう」

その返答に気を良くした凜はかつてのように、指を立てて笑顔で返す。

「よろしい。で、その鞄なんだけど、アンタのものよ。アンタがその『担い手』」

そしてトンデモナイことを吐いた。

「……は!？」

「セイバーは貴方を心配していました。すぐ危険の前に立って死にかけるもんだから彼女はもうこの際だから死なないようにしてしまえ、とばかりにこれを貴方にお与えになったのです。これというフザけたことが分かつてるわけ衛宮くん!？」

「いや、俺にもさっぱり何がなんだか!？」

凜の表情は「あくま」の笑みから鬼の怒り顔へ。変化の忙しい美女だ。

そして再び笑顔に表情を戻し、改めて士郎に問いかける。

「アヴァロンの効果は覚えてるわよね、士郎。身をもって、ね?で、アヴァロンの伝説上の位置づけというか役割も覚えてるわね?じゃあ問題!アヴァロンを無くしたアーサー王はどうなりましたか、答

えなさい衛宮君！」

凜はやはり怒っているようだ。

「えーと……不老不死じゃなくなった？」

「パーフェクトよ。つまり、アヴァロンは貴方のモノ、貴方はどうなるわけ？」

「まさか……！」

士郎の驚愕にも関わらず、凜は笑顔で告げる。

「そうよ、不老不死。アンタはこの世界で最も異端よ。じゃあ

心置きなくこの世界を去りなさい。これはその馬鹿の願いでもあるみたいだしね。英雄エミヤに成り下がる前に、とっとと消えなさい」

告げ終わると彼女はいきなり真顔になり、魔力回路を回し始める。

「どういうことだ……って、そんないきなり無体な！」

「つべこべ言わない！アンタこの世界にもう逃げ場ないんだから！行くわよ！」

「ちょ！遠坂、待

士郎が待ったをかける間も無く、彼女は容赦なく彼を『落とした』。

これが衛宮・士郎の漂流記のプロローグだ。

彼は彼女の隣に立つに相応しい条件を手に入れていた。

そして、何の気まぐれだったのか。

あの彼が、士郎に贈り物などとは。

そしてヒトリ残った彼女。

彼女は自分の判断を信じている。

彼女は彼の希望を信じている。

「アンタはどうせ諦めないだろうから。思いっきり遠い世界に飛ばしてやったわ、どんなのかは知らないけど。まあがんばりなさいな、士郎」

「幸せ探してもしてくれるのが一番心配ないんだけど、ねえ？そう思うでしょ？セイバー、アーチャー……」

ロリのオイタは許すが情け（前書き）

ロリネタを………自重しようと思った………っ！
まあそろそろ「合法ロリ発見の巻」が終わるといふことなんだが。

ロリのオイタは許すが情け

……秘密の多い男だな。

エヴァンジェリンが見ているのは、士郎の顔だ。

その顔は懐かしいことを振り返るような表情。

苦い笑い気味だ。だが、それでも辛いことを思い出しているようには見えなかった。

……恐らくは女絡みだな。昔の女の事を思い出しているように見えるな。癪だ。

いや、何で癪に障るんだ？自分の事だがよく分かん。

それは、いわゆる

気になるひとつの病気というやつです。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

貴方が今感じている感情は精神的疾患の一種です。

しずめる方法は私が知っています。私に任せてくださいお嬢さん。幼女

t o u c h ?

Y e s / N o

A . Y e s ! y e s ! y e s ! Y O O O O O O O O O O O O O O O
O O O O O O O ! ! ! ! !

I t ' s f a n t a s t i c ! ! F O O O O O O O O O O O O
O ! ! ! ! !

ガチャン

H a h a h a h a h a h a h a ?

YOU ARE UNDER ARREST.
.....oh, no, my lolita.

その後、彼の姿をシャバで見たものは居なかった。

Yes lolita, No touch!
Never forget it!

- - - - -
- - - - -
- - - - -

その感情は、恐らく何十年ぶりに湧き上がる感情だっただろうか。
彼女はもう、秘密の多い男に惹かれるという年頃でもないが。

.....何となく、気になる男だ。

不老不死で正義の味方志望で、それでいてこんな私わるものを守るという。
裏がない、と思うほうが可笑しい。王子様に憧れる世間知らずのお嬢様だったなら
信じるだろうが。

お嬢様、か。

と、エヴァンジェリンはそこまで思考すると、自己を振り返り始める。

.....そういえば、私も真正正銘、上級貴族のお嬢様いとこだったな。
まあ、吸血鬼に成りたての世間知らずの頃なら無条件でこの男に縋り付いただろうな.....

昔の自分と今の自分を比べる、という行為は彼女には珍しいことだった。

嫌な記憶を掘り返すことは出来るならば避けたい。
人間にとって当然の理由だ。

元人間だった彼女もまた例外ではない。今でこそ最強種吸血鬼の真祖の化物ではあるが。

そして、最後に行き着くのはこの一点。

……今の私は、この男に縋り付くだろうか。
ある種、振って湧いた幸運だ。

自分を肯定する人間が居るということは、それだけで心の支えになる。

例えその人間が私よりも弱かったとしても、私を肯定するその人間は私より『強い』だろう。

それに縋りたくなるだろう。昔はもっとその傾向が顕著だった、と思う。

だが……だが

孤独に長く浸かっていた彼女はある恐れを抱いている。

彼女が人形を従者にする一つの理由でもある。

それは、

……裏切るのだろうか。

この男は。

それが怖い。

信じる事が、恐ろしくて堪らない。

いきなり支えを奪われることに、また堪えられるのだろうか。

もしそうだったとして、また慣れていくのか。

……嫌だ。

そんなことは嫌だ。

三日月が夜空に輝いている。

わずかに光が溢れる夜で、炎が揺らめいていた。

二人と一体を月光と炎が照らす。

そして、薪の音だけが波紋のように響く。
音が見えるようだ。

森は静謐の中にあつた。

「で、だ。俺を雇うか、どうか。決めてくれないか」
「・・・・・・・・・・・・・・・・考えさせろ」

士郎がエヴァンジェリンに問いかけると、彼女は迷いを晒した。
だから彼は、その迷いを肯定する。

「そうか、そうだよな。 うん、今すぐ決めてくれなくてもいい。ただ、ちゃんと答えてもらえると嬉しい」
「ん・・・・・・・・分かった」

そう答えると、彼女はどこか上の空になり始めた。
悩んでいるのだろう。

……相手に見られながら考える、っていうのも中々心が落ち着かないだろうな。

・・・・・・・・よし。

士郎は布を3枚ほど『影』から取り出し、エヴァンジェリンに渡した。

二人が居るのは、パリから更に東にある森。

パリ周辺はは所謂西岸海洋性気候だ。

夏は余り暑くならない上に、あまり高緯度のわりに寒くもならない。
さらに空気は乾燥しており、水は貴重だ。

そういう事情で雑草も育ちにくく、森でそういったものに足を取られる、ぬかるみに嵌る、ということは殆ど無い。
だが、ここはパリの周辺で、今は春だ。

パリの春は気温変遷が一定ではない。

冷える可能性も、暖くなる可能性もあるという不安定っぷりだ。

だから士郎はとりあえず、凍えるよりは寝苦しい方がマシだ、と判断した。

それに、3枚全てが使われる必要があるわけでもないのだ。

「これ、毛布替わりにしてくれ。服と別に一枚は布を羽織ってるって言うても、まだ春だしな。

此処は森だからもつと冷えると思う。

今日特別冷える可能性が無いわけでもないし、3枚くらい必要だと思っただが、大丈夫か？」

手渡すと、エヴァンジェリンはやはりやや上の空で、

「……………ん。その、助かる……………」

「よし。済まないけど、俺は先に寝てしまっが構わないか？薪は今ある分で足りると思うから、使ってくれ」

「……………構わん。勝手に寝ろ」

「ありがとう。じゃあ、お先に」

そんなやりとりの後、士郎もまた『影』から布を1枚取り出し、それに包まって胡座をかく姿勢のまま、一本の菩提樹に寄りかかって眠り始めた。

彼は彼女の迷いが晴れることを何より望んでいた。

この一晩で悩みが終わることを願った。

彼のこれからのためではなく、彼女のこれからのために。

目の前の男が眠り始めたのを見て、少女は思う。

……気を使ったのか。

こちらとしても、相手を目の前にして長々と待たせるといった意識を持つのは、余りいい気分ではない。

素直に、少し有難いと思う。

ふとそう考えた後、この男に対してある思いが強まり始める。

……ここまで優しくされたのは何時振りだったか。

『こう』なった後も少しは好意を受けたことがある。

だが、いつしか自分から避けるようにもなった。

あまり他人に関わると、自分の身に何が降りかかるか分からない。その他人が自分に関わって不幸になるというのも善しと思わない。そうなったことが一度二度あつたはずだ。

だから、誰も自分に関わるべきではないのだ。

だから……いや、でも

この男なら。

彼女の答えが固まり始める。

だが、すぐに瓦解する。

……違う。まだ、信頼できない。

信頼したい。この優しさを信じてしまいたい。縋りたい。

だがこんなものの気の迷いだ。

自分は、

出会ったばかりの得体の知れない男に、
少し優しくされただけで、

靡くような馬鹿なお嬢様なのか？

何も知らない愚かな子供なのか？

そして一周する。

だが、この男の自分自身を評する言葉を思い出す。

騙された女の子、って感じか？しかも報われない。

……正しい。間違っていない。

この男は確かに自分の概形を一瞬で理解した。

恐らく、自分の欲しいものをくれるに違いない。

今だってそうだ。

今現在、私はそれを受け取っている。

それでも、当てずっぽうだったかもしれない。

魔女として狩られる女なんぞ半数がそんなものだろう。

やはり、信頼に値するには弱い。弱すぎる。

思考は堂々巡りに入り始める。

そして、たったひとつ。

最悪の
やりかた
冴えた判別方法を思いついた。

……記憶を覗いてしまえ。

記憶を覗けば、シロウ・エミヤという人間をほぼ完全に見定められるはずだ。

人間として、最も恥じるべき行為かもしれない。

だが、裏返しにだ。

本心では、そこまでしてでもエヴァンジェリンは士郎を信じたかった。

この風変わりな傭兵のくれる温もりを本物だと思ったのだ。

そして、後悔した。

始まりは夜から。

全てが燃える地上の地獄。

戦場ではない。略奪された街でもない。

そこでは、邪悪があつた。

黒より黒い月が浮かぶ空。

闇よりおぞましい闇を吐き出す孔。

それは、邪悪そのものだった。

闇、否、泥にに触れたものはみな、気が触れて死んだ。

炎に包まれて死んだ。

闇に喰われて死んだ。

それは、天罰などではなかった。

記憶の中の赤毛の少年はそこ中を走っていた。

助けを求めるのか、誰かを求めるのか。

それは客観では推し量れない。

ただ地獄の中を走っていた。

炎に焼かれながら、泥に喰われながら。

次の風景。

夜明けだ。

炎の勢いは弱まり、同時に周りの生命の気配も希薄になっていた。
少年はまだ生きていた。

生きていると分からない程度に死んでいたが、生きていた。

そして宛ても無く歩き出したが、少しすると仰向けで倒れた。すでに目は死んでいる。死人の眼だ。

この少年は死んでいる。

すると、今度は男がさまよい歩いているのが見えた。

黒い背広とコートを着た男。

エヴァンジェリンには見たことのない服装だ。

その男は異国の言葉で、絶る思いで叫び続けている。

だが、その言葉の意味はエヴァンジェリンも理解できた。

「誰か……誰か……生きている人は居ないか……」

死んだ少年が、手を天に向かって伸ばした。

それを認めた男が走りよる。

その手が力を失い、落ちると同時に。

掴まれた。

男はついに生存者を見つけた。

最後のささやかな望みを叶えた。

そして、男はその願いの成就を喜んだのか、心からの喜びを、その憔悴しきった顔に浮かべた。

あまりに嬉しそうに。

少年ではない。

救われた人間が笑っているのではない。

救った人間が笑っているのだ。

「ありがとう……生きて、っ……いてくれて……
……ありがとう……」

まるで救われた罪人が赦しに喜ぶように、その男は笑った。
涙をこぼしながら。

成程、おそらくその男は救われたのだ。

少年はそれを呆然と見つめている。

そして、次の瞬間に少年の目に光が灯った。
蘇生したのだ。

エヴァンジェリンは恐怖した。

目に光が灯っただけだったから。

少年は蘇生した。目にも生気が再び宿った。
だが、それだけだった。

人間の目を、していなかった。

そしてエヴァンジェリンはさすがに気づいた。

この赤毛の少年こそが、幼き日のシロウ・エミヤだと。

彼女の後悔が形になり始めた。

辱・ロリのオイタは許すが情け（前書き）

「辱」はぞく、と読んでください。

あといつものQ&a m p ; Aは後編扱いなのでお休みです。

辱・ロリのオイタは許すが情け

3 番目だ。

白い部屋。

ベッドが並ぶ一室にたくさんの子供達が寝ている。

皆、大小の違いさえあれど負傷している。

士郎もその一人であった。

負傷はひとつ前の記憶よりも回復しているように見える。

そこに一人の男がやってくる。

またあの黒い男だ。

彼は少年を見つけると、気の抜けたにこやかな笑みで歩み寄ってくる。

……なんだコイツは。正直、

胡散臭いぞ。

『さっきの』を見ていなければ私は嫌な顔をしたかも知れないな。

エヴァンジェリンはそれを見て考えながら、周りの状況も気にしていた。

記憶の再生を一旦停止して、周りを観察し始める。

……ここが黄金郷か？ジパングなのか？

確かに人々の顔立ちは欧州では見かけない。

だが、ここは 何処だ？

彼女は彼の出自を疑い始めた。

というより訳が分からなくなった。

それもその筈だ。

この風景は、1500年初頭の世界には存在しない。
言うまでもなく、彼女は『まだ』気づいていない。

……とりあえず、進めよう。進めれば分かるかもしれん。

記憶の再生が再開した。

男が士郎のベッドのとなりの椅子に座ると、話を始めた。

「こんにちは。君が士郎くん、だね？率直に聞くけど。君は、孤児院に預けられるのと初めて会ったおじさんに引き取られるの、君はどっちがいいかな」

男はそんなことを言っ、て、士郎の反応を伺う。

……これは、胡散臭いな……。！それに話が早すぎやしないか？自分が見つけた生存者だったとは言ってもだ。

そうエヴァは苦笑いを浮かべ、また、訝しみ考えるが、すぐ士郎の返答がある。

「……おじさん、俺の親戚なのか？覚えてないんだけど」

「ああ、いや、そういうわけじゃないけどね。所謂赤の他人ってやつだよ」

士郎がそう問いかけると、気の抜けた笑みでそう答えた。

……赤の他人なのか。なら本当に、何故引き取ろうと考えたのか。解せないな。

そして、選んだ。

士郎はその男に付いて行くと決めた。

「……わかった。行くよ」

「そうか、良かった。なら早く身支度を済ませよう。新しい家に、一日でも早く馴れなくっちゃいけないからね」

……決断が早いな。

まあ、それもそうだ。『生きている』だけの人間は悩む頭も無い、か。

男は荷造りを始める。

手際は悪い。

この男を不器用な人間だと断じるには十分なほどだ。しかも

……うん？さつきより散らかっているような気がするのは気のせいなのか！？気のせいか！？

この様だ。

そんなこんなで何とか荷物をまとめると、胡散臭い男は腰を丸めて鞆の取っ手を取る。

そして何かを思い出したかのようにこんなことを言った。

「おっと。大切なコトを言い忘れた。……ウチに来る前に、一つだけ教えなくちゃいけないコトがある。いいかな？」

そして鞆を地面から離し、姿勢を戻して振り返りながら男は言う。

「うん。初めに言っておくとね。僕は、
魔法使いなのだ」

そう宣った。

……なるほど、胡散臭い。本当に胡散臭いな。

だが、士郎はそんな男の言葉に向かって、

「うわ、爺さんすごいな」

目を輝かせて言った。

……まただ、その目だ。

それは、人間の目ではない。

火を点けられただけの蠟燭の目だ。

そしてようやくその男は名乗った。

「ああ、そうだ。僕の名前は衛宮・切嗣。よろしく、士郎くん」
「……うん、よろしく」

……エミヤ・キリツグ……？

確か、アイツの名は、シロウ・エミヤだったはずだ。

ふむ……ああ、姓名を逆に並べるのか。なるほど。

欧州
こちらでそういう名乗りをするのはハンガリー、だったか。その人間くらいだったはずだ。

これがジパング式の名乗りなのだろうか。

エヴァンジェリンはそういうことを考えていた。

推察と理解の試みを続けている。

だが、分かったことがある。

……アイツはこの時、シロウ・エミヤになったんだな。

そこで、第3の記憶は終わった。

第4が始まる。

さっきの記憶よりそれほど時間の経っていない記憶のようだ。

切嗣と士郎は武家屋敷に住まう。

これもエヴァンジェリンにとっては非常に驚くべき光景だった。

……おお、これがジパング式の住居か……！
靴は脱いで入るのか！初めて見たぞ！

ん？この部屋、床が木で出来ていないな？

流石に手触りまでは読み取れんが、珍しいモノを見た。

異文化を知るということに相当興奮している様子の彼女。

好奇心は錆び付いていただけで失われては居なかったようだ。

だが、彼女にとって奇妙な風景が始まる。

……あの箱は何だ？
人が中で動いている。

いや、水盆や鏡に姿を映して遠くの人間と会話する魔法も有ったはずだ。

それと似たようなもの、か？

だがこれは会話をするようなモノには正直見えない。

この二人も見えているだけ、という風に見えるな。

テレビを初めて見たエヴァンジェリンだが、魔法的な観点で推察を始める。

ふつつの中世人よりも動揺が少ない、のでは無かるうか。

その後も二人の生活を見ながら、ジパングという国を知ろうと試み

を続ける。

天井に吊り下がる球体から発せられる光で夜も明るい中で生活できるのを見たり、

直方体の箱に水やら食料やらが詰められているのを見たり、

やけに切れる短剣で料理をしているのを見たり、

4つの車輪が付いた箱が跋扈する道路を見たり。

魔法なら可能だろう、と考えている彼女にとっては、確かにそれらは珍しいとは言っても、大きな驚きではなかった。

だが、それは無意味。

彼女が『そのジパング』に実際に行くためには、絶望的なまでの時間のズレ

望的でも何でもないが

がある。

彼女は未だ気づかない。

……だが、ここで気が付いた。

魔法使いをすごい、とシロウは言っていた。

恐らく、未だに魔法使い

魔術師は存在が疑われる程度

にコソコソしているのだろう。

なら、あの生活の中で出てきた器具の尽くは魔法の力で動いているわけではないのだろう。

……ん？なら、あれらはどういうモノだというのだ？

おかしい。

ズレた。

彼女の認識とこの記憶の前提のズレが、見え始めた。

第5。

2、3年程経っているのだろうか。

士郎が一人で家のことを何とか出来るようになった頃から、切嗣はよく家を空けるようになった。

世界中を冒険してくるのだ、とか何とか。

一ヶ月いないことは当たり前、半年に一度帰ってくるということも有った。

そこで、もう一人の登場人物が現れている。

藤村・大河。

近所に住むお姉さん、という奴だ。

実際は第4の記憶から出現はしていたが、第5ではさらに登場回数が増えた。

切嗣の不在があるのだろう。

寂しい思いをさせたくない、という優しさか。

欧州の読み方

……フジムラ・タイガ。いや、コチラの読みではタイガ・フジムラか。姦しい女だが、うむ。悪人ではない。むしろ善人だろう。

それにしても、キリツグという男は何をしていたのか。

引き取った養子をほっぽり出してどこへ行っていたというのか。

世界中、とは凄まじいスケールだと思うが。

……なるほど。世界中なら確かに仕方ないかもしれない日数だ。

それくらい掛かるだろう。

第6。

記憶の基本情報によると、5年経ったらしい。

それまでに、士郎は切嗣に「魔術」を覚えてくれるようにせがんだ。切嗣は嫌々ながらもそれを教えた。本当に、少しだけだった。

……魔法（magical）、ではない？
魔術（magical skill）？こんなモノは見たことがない。

エヴァンジェリンは自己の認識と世界の実像のズレをはつきりと自覚し始めた。
それまでも違和感程度は感じていたものの。

今度の風景は月夜の縁側。

着流しを着た切嗣と、その隣で士郎。

二人は月を見ている。

いい月夜だ。

そして切嗣の語りが始まる。

「子供の頃、僕は正義の味方に憧れてた」

「なんだよそれ。憧れてたって、諦めたのかよ」

「うん、残念ながらね。ヒーローは期間限定で、オトナになると名乗るのが難しくなるんだ」

そしてため息と苦笑いの後で言葉をさらに継ぐ。

「　　そんなコト、もっと早くに気が付けば良かった」
深い、哀しみが見えた。

……何を言い出すかと思えば、この男も『その類』か。

報われなかった。理想に裏切られた。そういう男か。士郎にその哀しみが見えたのか、それは分からない。だが、深く考えた結果、意を得たらしい。

「そっか。それじゃしょうがないな」
神妙な顔で、そう言葉を掛けた。

「そうだね。本当に、しょうがない」

二人はままならない世の中への哀しみを分け合っていた。

そして、切嗣は目を細めて、嬉しそうに月を眺めている。
何かを喜んでいるようだ。
だが

……ああ……この男は。
死ぬ。

もう、本当に間もない。

そのようにエヴァンジェリンは直感した。
彼女は死なない。永久に。

だが、死の気配に鈍感というわけではない。

殺してきた経験がある。それが死というモノの一端を教えてくれた。

声が聴こえる。

士郎の声だ。

「うん、しょうがないから俺が代わりになってやるよ」
その誓いは軽い口調だった。

それは切嗣がやって来た時の秘密の暴露のシーンを思い出させた。
気軽に重大なことを言っただけ。

それが、さも、あまりどうということでも無いように。

少年は、光っていた。

…… ああ、まただ。あの眩しさだ。

あの時見た眩しさと同じだ。

……怖い。私を、殺すのではないだろうか、と思うくらいに。

エヴァンジェリンは、そんな風に怯えた。

それとは別に、記憶の再生は続く。

「爺さんはオトナだからもう無理だけど、俺なら大丈夫だろ。まかせろって、爺さんの夢は俺が」

ちゃんと、カタチにしてやっから

そう、士郎が言う。

ガチャン、

と、鉄の落ちる音が、した。

カン、

カン、

と、鉄を鍛つ音が聞こえ始めた。

哀しい音だ。

孤独な音だ。

エヴァンジェリンは、幻の自分の身体を抱きしめ、震えた。

「そうか。ああ 安心した」

そうこぼした衛宮・切嗣。

それが、最期の言葉だった。

安らかな死に顔だった。

「 爺さん？」

士郎は、養父が動かなくなったのに気が付いた。

「爺さん……………」

さらに気づいた。

養父が死んだと。

ついに止まったのだと。

それでも、彼は涙を流さなかった。

養父だった男の旅立ちを、見送った。

そう、いつものように。

当然だった。

世界が明滅を始めた。

ノイズだ。

そして記憶の世界はほどけた。

彼が貴女を助ける時、貴女は彼を救えているのだ（前書き）

合法口リ発見の巻、完！

彼が貴女を助ける時、貴女は彼を救えているのだ

「っ!？」

突然のノイズで、エヴァンジェリンの行為は止まった。

そして、目の前には。

「……見てたのか」

そう呟いて苦笑いする衛宮・士郎。この行為に怒っている、という様子ではない。

その笑顔は、エヴァンジェリンを困惑させる燃料だった。

「………っ」

「そこまで面白いもんじゃなかっただろう? ああ、いや面白かったかもしれないな」

そう言つて、今度は無邪気に笑った。

既に夜明けた。

かなりスローで記憶を読んでいたせいだろう。

見ていた時間と比べてコチラではあまり時間が経たないとは言え、だ。

エヴァンジェリンは半自失にあった。

理由は四つ。

まず、一つ。

目の前のこの男が目覚めてしまったこと。

二つ目。

記憶を見る限り、間違いなくこの男は善人だったということ。
今の彼を見る限り、本質を見図るにはこれだけで十分だった。
三つ目。

あまりに奇妙な光景ばかりだったこと。
四つ目。

この男が、あの少年だということ。

特に、四つ目は彼女にショックを強く与えた。

……アレが、この男なのか。

あんな人形のような少年が、今日の前にいるコイツなのか。
……この男の本質は『他者の救済』。
まるで剣だ。

『切れる』という本質しかないそれだ。
それをどう使うかは使い手次第だ。

誰を救うのかも使い手次第だ。

だが、どうだ？

この男自身が『剣』なのだ。

なら、使い手は？

誰だ？

シロウ・エミヤというモノを動かしているのは、一体何なんだ？

- - - - -
- - - - -
- - - - -

人は、幸せになれる。

けれど、剣はどうなる？

議論の価値
あり/なし

A・あり

愛でられるのが幸せか。

使われるのが幸せか。

人間にそんなのわかりやしない。

でも、わかりたい。

それは、愛、じゃないですか？

- - - - -

……起きてしまったな。

久しぶりに懐かしい夢を見ていた、と思ったが……そう
いうことだったか。

まあ、仕方ないか。

衛宮・士郎は記憶を覗かれたことについて、別段何とも思っていない。
い。

それを「仕方がない」と許容すらしている。

……まあ、こんな胡散臭い人間を何も無しに信じられるような人間
は居ないよなあ。

って、俺がそうだったか。爺さんと出会った時の。

あんな奇妙なことと言う大人を素直に信じてたからなあ。

「僕は魔法使いなのだ、か」

「ひっ……！！？」

「……………え？」

エヴァンジェリンは一步を下がる。

そして、バランスを崩して尻餅を付いた。

彼女はこんな態でも最強種だ。
だが、彼女は怯えていた。

士郎はそのことに気が付いた。
まるで悪戯がバレて怒られそうな子供のようだな、と何となく考えている。

「どうか、したのか？」

「あ……………！……………」

士郎がそんな目の前の少女に心配そうに問いかけると、彼女はさっきの反応を恥じるように顔を顰めて
彼から目を逸らした。

……………自分が何か悪いことをしただろうか？
うーむ。別段そんなことはしてはいないはずだが。

士郎は困った顔で悩み始める。
だが、悩んでも仕方ない、とすぐに断じた彼は、目の前の少女に問うた。

「……………俺、寝ぼけて君に何かシテたのか？もしそうなら、あの……………
……………その、ごめん！」

「……………ひ、人が真剣に悩んでる時にんなことを聞くな
あ……………」

「ぐあはっ！」

頭突きを鳩尾にお見舞いされた。
エヴァンジェリンは紅顔で涙目だった。

……俺^{ハート}の心に愛の必殺剣^{フラガ・ラック}……！って違う！

衛宮・士郎は病人^{ロリコン}ではない。

「……………すまない」

エヴァンジェリンが謝罪すると、士郎は息を整え咳払いをし、逆に聞き返した。

「……………えーと、何がだ？あと、俺何もシテないよな？」

士郎は飽く迄彼女を気遣う。自分の事などは二の次以下だ。

「何もされとらんわ！……………記憶を覗いたことだ。疑っていたとは言え、私はやってはいけないことをしたのだから責められるべきだ！人の記憶を勝手に覗くなど、それは恥じるべき悪徳だ……………！」

エヴァンジェリンは自分の行いに憤怒している。愚かな行為に走った自分自身を叱責している。

しかし、そんな様子も意に介さず、士郎はあっけらかんと言う。

「ああ、そんなことだったのか」

その反応は彼女を更に困惑させる。

「……………そんなこと、だと？」

その言葉は問いかけだ。しかし自己にも向かっている。

……私なら許せないだろう。

自分でやっておいて何だが、多分酷い目に合わせるくらいでは済ま

ないのでは無かるうか。

「まあ、ちよつと照れくさい気はするけどな」

士郎は頬を右の人差し指で掻きながら、少し恥ずかしそうに笑う。
それだけだ。怒りはしない。

「お前は勝手に秘密を知られて何とも思わないのか!？」
逆にエヴァンジェリンは混乱を怒気の入った口調で表す。
その問い掛けに、もはや問い掛けという意味は殆ど無い。

「え?.....あんなものは秘密の内にも入らないと思うぞ？」
「な.....!？」

肩透かしの回答に、エヴァンジェリンは訳が分からない、と混乱の
極みだ。

「.....俺も、正義の味方に憧れてるんだ。それは昨日から
言ってることだし、秘密でも何でも無いよ。そのきっかけも見ただ
ろ?だからまあ.....少し、恥ずかしいくらいかな?でも、今
度からはちゃんと言ってくれるか？」

記憶を読むことを咎めないと言った。

だが自分に「許可を得てくれ」.....違う。

「言うだけでいい」。それだけで良いと言っている。

エヴァンジェリンはこの事について問うのはナンセンスだった、と
悟り、そのことについてあれこれ考えるのをやめた。

そして、彼女が聞きたいのはこの一点。

まるで子供だ。

「.....お前は、私を責めないのか？」

「責めないさ。別に悪いことをしたわけじゃないって、俺が言って

るんだから」

士郎はもういいじゃないか、と言って彼女を許す。否、最初から彼女は悪くないとさえ思っている。

エヴァンジェリンの心は決まった。

……ああ、私はようやく、居場所を見つけたのか。分かった。それならば、だ。例えコイツが亡霊のような存在だったとしても、私は、この優しさに縋りたい。それは贗物ではなかったのだから

「シロウ」

彼女の迷いは消えた。

だから、名前を初めて呼んだ。

「何だ？エヴァンジェリン」

飽く迄普通に士郎は答える。

だが、名前を呼ばれたのが少し嬉しいのかも知れない。わずかに目が細まっている。

「エヴァ、でいい」

「へ？」

彼女の言葉に士郎は間の抜けた反応を返す。

「少し長いだろう。呼びにくいだろう。だからエヴァでいいと言ったんだ」

「シロウ、お前を雇おうと思っ」

契約は此処に成った。

「そっか で、契約期間は如何ほどに？それか、何処まで？」

「とりあえず、私をジパングまで連れていけ。あそこには興味がある。あんな奇っ怪な光景を魅せられて興味を持たないほうがおかしい」

「ああ．．．．．やっぱり面白かったか」

士郎は何か言いにくそうな表情でそう言う。

そして、またも彼女は肩透かしにされる。

「あー、その。何というかだな。『今』のジパングには、あんなものはないよ」

「何だと？なら、あの記憶は何だというんだ．．．．．！？」

そして、最も胡散臭い一言。

否、今回見せた記憶に対する違和感の殆どを解消する意外な答え。

「ゴホン．．．．．契約を開始するにあたって、言っておかなくちゃならないことがあった。

俺は 未来人なのだ」

そんなことをこの男は言った。

何時かの胡散臭い黒服の男のように。

「

は？」

当然も当然。エヴァは啞然とした。

そして、大方の疑問が「そうかー未来なら仕方ないなー、そうかー未来なのかー」と解決しつつもあった。

「

え？あ、いや？

え！？」

だが、納得しかねている。

時間移動という概念を初めて植えつけられたのだ。仕方がないだろう。

「ああ、ついでに言うと、異世界人なんだ」

「異世界？」

さらに、意味を理解しきれていないエヴァに、最も理解の難しい言葉が出た。

これは士郎にとっても説明が難しい。

ここは16世紀。量子論なんぞはまだ存在しない。

「『魔法』ではなく、『魔術』。俺の記憶ではそうだっただろう？

俺の居た世界では、『魔術』が主流だ。違いと言えば

何というか、俺の世界の魔術師はその、

陰険だ」

「……………」

未だエヴァは啞然としている。

だが頭脳は稼働している。理解しようともがいている。

「俺の世界において『魔法』って言うのはどうあがいても実現できないようなことを実現するコトの総称でね。それに向かって研究を進め続けるわけだ。まあ、そんななかで魔術師同士の権力闘争やら研究を盗まれないようにしたりとか盗んだりとか。まあ、学者みたいなものだな」

「……つまり、どういうことだ」

結局、エヴァは士郎にまとめを頼んだ。

「俺は未来人で、恐らくこの世界の未来も大体俺の知っている通りになるはずだ。でも、俺の世界では『魔法』ではなくて『魔術』があった。歴史に大した違いはなくても、『裏』に大きな違いがある」

……んー……よく分からんなー……

エヴァは首を傾げ、腕を組んで悩んでいる。

「まあ、仕方ないさ。こういう概念はまだこの時代には生まれてないんじゃないかな？」

その様子のエヴァに士郎は言葉をかける。

そう、仕方がない。16世紀の人間に「時間移動」「並行世界」という概念は最も縁遠い。

「で それでも俺を雇ってくれるか？」

改めて士郎はエヴァに言う。

「フン。もう契約は始まっているんじゃないのか？いきなり首にするようなことはしない。それに、その 面白そうじゃないか。決めた。お前の『魔術』の知識も寄越して貰うぞ。主の命令

だ」

彼女は彼を受け入れた。

感謝は言わない。

新たな従者はこう言って答える。

「仰せのままに」

「良カッタナ御主人」

それを、温度のない、しかし温かい目で見ている一つの人形があった。

「チャチャゼロ。起きたのか……」

「オウ、大体ノ話ハワカッタゼ。シロウ、才前
ジャーネーカ」

面白イ

ケケケ、と笑って機嫌の良さそうなチャチャゼロ。
彼女も彼を受け入れることは吝かではない様子だ。

「気に入ってくれたようで何より」

士郎は笑顔で答える。

「シロウ、出発だ。約束通り、ジパングへ連れていけ」
「了解した、マスター」

「ケケケ、コレカラ宜シク頼ムゼ、シロウ」

「では、行こうか」

エヴァの号令で全てが始まった。

さあここからだ。

二人と一体が森を出る。

今日は、晴れていた。

太陽の登る方へ、彼らは行く。

彼が貴女を助ける時、貴女は彼を救えているのだ（後書き）

ギャグ要素が全くないのが続いたので少しだけ緩いところを入れてみました。

次の更新まで間があくと思いますが、気を長くしてお待ちいただけるとこれ幸い。

ねえどうするわけ？どうするわけよ？（前書き）

大旅行のルートを決めるお話です。

つまらないかも知れませんが、ご勘弁を。

ねえどつするわけ？どつするわけよ？

「さて

」

森を出て平原を歩く一行。

3人の格好は一樣に同じだ。

エヴァ、士郎、チャチャゼロ。

3人ともくすんだ肌色の布を外套として纏う形になっている。
その中身は三者三様。

士郎は黒の革鎧、黒のパンツ、そして紅い外套。あの紅い弓兵とほぼ同一だ。

エヴァはシュミーズを肌着に膝丈くらいの色あせた肌色のチュニツク。足は裸足だ。

チャチャゼロは人形の黒い服。

時代的にマトモなのはエヴァ、旅支度としてマトモなのは士郎だけだ。

チャチャゼロは人形なのでその辺りはあまり関係ないだろう。

「出発するのは良いが、どついう経路なのかは分かっているのだからな？」

立ち止まって士郎にエヴァが問いかける。

同様に士郎も立ち止まり、振り返って答える。

「ああ、そのことなんだが

」

- - - - -

- - - - -
ユーラシア大陸横断して何の冗談だよ？
ええじゃないか！／ヒコーキカモオン

A・ええじゃないか！
寛平ちゃんがんばったじゃないか！地球一周！

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「急いでフランスを出よう」

士郎はまずこの事を言う。

「ふむ……………」

士郎が最優先事項としてこの事を挙げたのは当然だ。

二人は逃亡者なのだ。

処刑中に魔女が逃げたなどということは非常に珍しい。

だが、魔女が逃げたからと言ってそこまで神経質になるだろうか。

いや、なるだろう。

16世紀は魔女狩り全盛。

さらに彼女は『裏』では賞金首だ。

……このままフランスに居ては、まず魔術師連中に嗅ぎつけられる可能性が高い。

それより早く教会の尖兵に嗅ぎつけられる可能性は……………恐らく無い。

だが、どちらも脅威だろう。

「まず、俺達はその事件で大いに目立った。顔も知られた」

「……………燃やされて死んだ後にでも助けられればそういうことも無かったんだがな、ククク」

「ソウスリヤ逃亡者デスラネエカラ何ノ危険モ無ク逃ゲラレタンドケドナ、ケケケ。マア、燃ヤサレルノモ危険ナンドケドナ、普通ナラヨ！」

「んー……あまり意地悪を言わないでくれ……」

士郎は少し落ち込んでいる。

後先考える余地が無かったのは事実だし、その時にはこの少女の『事情』など知らなかったのだ。

「すまん、まあ……感謝はしている」

エヴァはそのことに気づき、謝罪し感謝する。

「ん。どういたしまして、だな。でだ、当分の間は情報はフランスだけを駆け巡るはずだから、まずこの国を出てしまえ、という感じだな」

「それには異論はない。またあのようなことになるのは少々面倒だ」「殺してでも逃げる、という状況は俺としてはあまり歓迎できないしな」

「そこまでは理解した。で、フランスを出て何処へ行くというんだ」

「そこだ。そこが少し問題なんだが……」

「何か問題があるのか？」

そこで士郎は『魔術』で世界地図を創りだす。

「これが世界全土の地図だ。まだこの時代には無いけどな、見せてもいいか」

「……すごいな。これが、世界……」

「俺達は今、この辺りだ。パリの北東だな。だから……って話聞いてないな？」

「……フランスはお前の時代にも残り、オスマンは消える……イングラランドも残り……それに西の海にはインド

ではなく別の大陸があるのか……そこにも国がある……
・何て大きな国なんだ……」

エヴァは世界の全貌を初めて見た。

彼女の好奇心は大いに刺激され、地図に夢中になっている。

「ハハハ……まあ、仕方ないか」

「御主人マルデ子供ダナー。イヤ子供ナンダケドヨ、ケケケ」

「うるさいぞチャチャゼロ。シロウ、ジパングはどれだ？ 遙か東と言っていたが……」

「ああ、大陸の端からさらに東の海の……そう、この島国だ」

「遠いな……どれくらい掛かるか分かるか？」

「それは俺にもちよつと分からないな……」

「ふむ……そうか……」

その後もしばらくエヴァは地図に夢中になっていた。

士郎は微笑ましく見つめ、チャチャゼロはいつもどおりケケケと笑いながら御主人と地図を眺めていた。

「で、そろそろ良いか？」

「……ハッ！ す、すまん……」

夢中になっていたと気づいたエヴァ。少し恥ずかしそうで、顔がほのかに赤い。

珍しいものを見て興奮しているのもあるのだろう。

「いや、構わないさ。で、俺達の居る場所からフランスを急いで脱出するとなるとだ。」

今の国境はどのあたりだったか……まあいい。とりあえず、この地域に入ることになる」

士郎はフランスの北東の辺りを円を描くように示す。

この地図ではちょうどドイツの辺りだ。

ちなみにこの時期のフランスは現在よりも国境がオーストリアに押されていた。

それ以前の100年戦争時代はイングランドに大部分を奪われていたことを考えると凄まじい領土回復では有るのだが。

その立役者として有名なのが、かの「ジャンヌ・ダルク」である。しかし、哀れなことに彼女は異端者としてイギリスの手で魔女として処刑されたのだが。

「神聖ローマ帝国、か。この地図ではGermanyとなっているからいい気味だ……！私に言わせれば神なんぞクソ食らえだからな！」

「オーオー御主人モット言エー、チン ス野郎ク イストー」

…… チャチャゼロが煽っているが、エヴァは止めてくれるだろう……

そう士郎が考えていたが期待は裏切られる。

「ファッ ソゴッド！ ソッタレ野郎ジー ス！」

見事に煽られた。病気だ。

「そこまで言うか……！てかもう言うな！マズい！色々マズいから！止めて！」

「ホーリー イイット！神は ねえい！」

「イイゾー御主人ーパトママハベッドデゴロゴロー」

「頼むから止めるお ……」

エスカレートしていく二人に士郎は大慌てだ。混乱だ。

メダパニだ。

そしてチャチャゼロは未来を先取りしていた。

「すまん・・・・・・・・調子に乗りすぎた」

エヴァは目尻を右手の親指と人差指で抑えながら、ため息を付く。
・・・・・・・・年齢100を超える私がガキのように・・・・・・・・情
け無い・・・・・・・・

「まあ、これからはちよつと自重してくれ・・・・・・・・」
士郎も苦笑いが漏れる。

「御主人大人ナラモット節制シロヨ・・・・・・・・アア、ガキダツ
タナ。ナラ仕方ネエナ、ケケケ」

チャチャゼロの煽りは止まらない。

主人を貶してもう一度点火しようと試みる。

「チャチャゼロ！お前も煽っただろうが・・・・・・・・！あとガキ言
うな！」

・・・・・・全く・・・・・・・・見た目はガキでも中身はババ・・・・・・・・って違
う！

歳を言うとかババババアと言われることに気づいたエヴァはガキに対
して反応しないと決めた。

それを読みきったチャチャゼロは更に方向を変えて煽る。

「従者ノ粗相ハ主人ノ責任ジャネーノカ？ナア、才嬢様？」

「き、き、きさ、貴様あ・・・・・・・・！」

「二人ともやめんかあ・・・・・・・・！」

士郎の叫びが今一度響いた。

「・・・・・・・・とにかく、その地域に入ることになるな。問題
はその次だ。カトリック圏から抜けるべきだ」

士郎は咳払いをし、仕切り直す。

「すまん・・・・・・・・」

エヴァはバツの悪そうな顔だ。

チャチャゼロはケケケ、と笑ってどこ吹く風だ。反省の色は見えない。

恐らくまたやるだろう。

「……だが、別に長く滞在するわけじゃないんだからその辺りは気にする必要は無いと思うが？」

エヴァの質問が始まる。

「この世界じゃどうだか知らないけど、俺の世界では異端狩り部隊があつたんだよ……化物狩りの化物集団だ」

士郎は自分の経験を思い出す。士郎を追う連中その2だったからだ。

「こちらでもその類の連中がいると正直マズイ、と？」

「そうだ。嗅ぎつけられると大事になるんじゃないか、ってことだ」

「ふむ……教会にも魔術師はいたはずだったな。成程、確かに嗅ぎつけられるのはマズいな」

エヴァは記憶を探ってその事を確認し、士郎の言うことも尤もだ、と意を得る。

「こつちでは教会も魔法の行使は認められているのか？俺のところでは使う奴は異端視されたんだが」

士郎も自身の記憶を掘り返す。否、これは掘り返すまでもなく危機意識が働いているだけか。

「所変われば、というやつか？そういうことは無かったと思うぞ。」

「実際は同じ『場所』なんだけどな、可笑しなことに。そうか……なら尚更近づきたくないな、特にバチカンには。そういう異端狩りの本拠というイメージがあるしな……」

士郎は遙か南東の方向を見て言う。

ここからは直線距離で1000km以上、さらにアルプスの山々を隔ててはいるが、今の彼らにとっては恐るべき存在だ。

「そうだな。そうでなくても近づくのはゴメンだが」

エヴァも苦笑いだ。だが嫌悪の色も見て取れる。

流石に自分を殺すような連中に好意など抱けるはずもない。

例外も多々あるのだが……………

「ケケケ、ジューダス・プリースト様様ダゼー」

またチャチャゼロの悪い癖が始まった。

士郎はすぐに止めにかかるが……………

「チャチャゼロ……………もう止めてくれないか……………
ほら、エヴァも」

「私もそれには同意するぞチャチャゼロ！よくしてくれたユダ！」

エヴァは両手を握りこぶしにして振り上げて興奮している。

彼女も病気だった。

士郎は絶望気味だ。

「だからマズいって！自重しろ二人とも！」

ちなみに実際にはユダは実行犯ではない。

キリストを裏切り、ユダヤ教の連中にチクッただけである。

まあそれでも重大ではあるのだが。

「またやってしまった……………」

エヴァは膝と手を地面に付けて落ち込んでいる。

顔もうつむいており、表情は非常に暗い。

「御主人も成長シネーナー。マルデガキダナ。否、ガキダッタナ。
ケケケ」

「またガキガキ言う……………！畜生、従者のくせに……………
……………」

歯をギリギリならして憤慨するエヴァ。

それでは子供の癪癪にしか見えない。

しかも結局さっきの決意も無駄にガキと言われて反応している。

「で、東方正教圏へ脱出、その後すぐにオスマン帝国、つまりイスラム圏へ入りたいと思う。異論や質問はないか？」

もう士郎は放置する方針のようだ。

二人ともどうせ話を聞くだろう。最終的には。

「というより、私はよく知らんからな、大体全部お前に任せるしかない……」

エヴァンジェリンは、ため息を付いている。

自分にはどうしようもない、ということは分かっているが、それに少し無力感を感じている。

「じゃあ、任せてくれるか？」

士郎は頼もしい笑みと共に答えを聞く。

「ああ、任せる」

「ありがとう、エヴァ。オスマンから先は着いてから決めるか？」

「そうだな、それまでに色々話を聞かせてもらうつもりだからな、それで決めよう」

こうやって当面の目的地・経路が決まった。

だが、まだ話は続く。

「よし、ルートが決まったのはいいとして、だ。

一応姿を変えて行くべきだと思うんだが……幻術は使えるか？」

そう士郎が問いかけるが、逆に質問で返される。

「いや、それより……さつきお前、地図をどこから出した？」

「ああ、それか。『魔術』だ。俺が得意なのはああいう類のことだけだ、へっぼこだし」

「……これ、何処に有ったものを『取り寄せ』たんだ？」

「いや、『作った』。グラデーション・エヴァ『投影』って魔術だ」

「『作った』……じゃあ、すぐ消えるものなのか？それにしては存在感が濃い気がするが……」

エヴァンジェリンは手に持っていた地図の感触・存在感を確かめている。

彼女には『本物』にしか見えないのだ。

「いや、消えない。俺が消すまでは残る。そういうものだ」

「……なんだと！？そんな魔法は聞いたことが……」

・『魔術』だから仕方が無いか、ふむ……」

エヴァは一旦驚くが、『魔術』と『魔法』にも違いがあるのだろう、と取り敢えず落ち着く。

「いや、本来ならエヴァの言ったとおり消えるものなんだ。でも俺は異端でね。消えないモノを作れる。それで多方面から追われてたわけなんだが……」

士郎が自らの過去の一端を話す。

それはまだエヴァが『見て』いない部分だ。

「……シロウ、それは誰にも見せるなよ。こちらでも異端中の異端だ。普通の教会の連中にも、異端狩りの連中にも、魔法使いにも見られてはならない」

エヴァの顔が険しくなる。

士郎のそれは『こっち』でも異端に入る。

こちらの魔法でモノがいきなり現れるようなモノは2つ程度だ。

『物質引き寄せ』と『アーティファクト』だ。

どちらも一から作るのではなく、ただの転送にすぎない。

『普通の投影』程度なら只の幻術で同じようなことが出来るだろう。だが、『衛宮・士郎の投影』は「有り得ない」と切り捨てられるほどの異常だ。

「それは痛いほど分かってる。でも、どうしてもって時には使うつもりだ」

士郎の表情は変わらない。

だが以前の経験から流石に学習しているようで、そう簡単に使うつもりはないようだ。

「……こんなナリでも私は強い。そういう危機的状況にはならんだろう。お前の武器もそれで用意しているようだな？」

エヴァンジェリンは最強種であり、今は戦う術も身に付いている。だから賞金首にもなったわけなのだが。

「ああ、嵩張らないしな」

「作っておいて『影』に入れておけ。それが影に手をつ突っ込んで取り出す振りをして『投影』しろ。いや、それか『来たれ』と詠唱して取り出せばアーティファクトだと思ってくれるか……」

「そういう方法もあるよな……そう言うならそうしよう。バレないほうがバレることの何百倍もマシだよな」

士郎は宙を見て少し考える。

士郎自身もあまり考えていなかったようだ。

やはり学習していない。

「よし。というわけで魔術についても追々教えてもらうぞ。拒否権はない。拒否すれば首だ」

エヴァは親指で首を切るジェスチャーをして「わるもの」の笑みを士郎に向ける。

「これは手厳しい。まあ、俺としては教えても構わないと思う。信用してるからな」

対して彼は芝居めかした口調で返す。

そしてまたしてもあつさりそんな事を言った。

「あつさり言うな……私はワルモノだぞ？それでもか？」

「ワルモノも何も、俺には君は、そういう秘密を言いふらしたりする子には見えない。あと、自分を『ワルモノ』と断じる人間には碌でも無い人間は居なかったと思う。むしろ、好意すら持てた」

……まあ、例外も居なかったわけではないんだけどな……それは例外中の例外である。

「……で、私にも好感が持てる、と？」

エヴァの顔が赤い。好意を向けられているような感覚がかなりこそばゆいようだ。

「ああ、こんなに可愛い娘が外道の筈がな」

だが、士郎は口下手で、朴念仁で、馬鹿だ。なぜその言い方を選んだ。

「やはり病人が貴様あ

！」

「げっしゅ！」

鳩尾にパンチを食らった士郎。

薄れ行く意識の中で思考するのは

……ああ、そういえば人は見た目によらないって……

《衛宮くん、それ誰に言ってるのかしら？ねえ？》

ありえない、幻を見た。

……あかい……。あかいあくまだっ……。……！
士郎は泡を吹いて倒れた。

復活するなり士郎はエヴァに謝罪する。

「すまん……。…」

「お前はアホか！？いや病人だ！」

……やはり病人なのか！？病人だったのか！？……。畜生見る目が無かったか……。！だが中々面白いのも事実で……。！

「ケケケ、御主人。クビニスルカ、コイツ？」

「だがせっかく見つけた新しいオモチャだ……。手放すには惜しいククク！」

「病人デモカ？」

「それは矯正すれば良からう！」

彼女は腰に手を当てて胸を張って言う。

「前向キナノハイケドヨ御主人、矯正デキナキヤ襲ワレルツテ危険ハドウスンダヨ」

「……。む……。…」

だが、再び自信を失い考えこむ。

件の人間の意志などどうでもいいと言わんばかりだ。

「俺が病人なのはもう疑いがないのか……。！？」

「幻術で私の姿が変わるとがっかりするのではないか？なあシロウ？」

「正直二言エヨ病人、ケケケケケケ！！！」

「だから病人って言うなあ　！」

結局幻術によって姿を変えることには成った。

エヴァは自分の成長した姿の想像図に変身する。
美しいブロンドの青眼の女性だ。

だが士郎は

「その・・・・・・・・まだ幻術魔法は覚えていなくてな・・・・・・・・
・教えてくれると助かる」

「・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・・・」

「本当ニヘツポコダナコイツ・・・・・・・・・・」

結局、その日の晩から幻術のレクチャーが始まった。

最も美しい広場の街・ブリュッセル 前編（前書き）

第魔法について捏造設定というか推測設定がありますお。

何か自分でも考えて違和感を感じるのですが、キンスンナという方向でG o A h e a d !

最も美しい広場の街・ブリュッセル 前編

最初の潜伏地であった森を出て3日。

彼らはハプスブルグ家領、つまり広義での神聖ローマ帝国へ入った。晴れてフランスを脱出することに成功した。

その成功の理由としては、まず移動速度がある。

この時代の道路は舗装されていない。

非常に歩きにくいのだ。

夏は埃だらけで、冬は泥だらけ。

底なし沼が存在することもあり、それに嵌って死ぬ人間も居ないわけではなかったと言う。

しかし彼らは只の人ではない。

二人と一体は魔法使いとその人形である。

もつと言えば、一人は最強種・吸血鬼の真祖、もう一人は熟練した傭兵である。

人形は真祖の溢れんばかりの魔力で駆動しており、浮遊しながら移動している。

道路事情もなんのその、である。道無き道すら彼らにとっては道だ。彼らは時には空を飛び、時には地を駆け抜けた。

そう、彼らはほぼ直線で進んだのだ。

そりゃ速いわ。

ちなみに空を飛ぶとき、士郎はエヴァの簾の後ろに乗っていた。

大丈夫！エヴァは幻術使ってたから！大人だったから！お似合い！ところで、士郎の幻術習得は未だ成らず。

ちなみに、実は古代ローマの時代のほうが舗装されており、一日100kmの行軍すら可能だったという。

すげー。ローマすげー。

更に、彼らは道無き道を行くことで徴税を徹底的に避けた。
二人とも今までと同じ事をしていたのだが。

士郎は『裏』関連も引き受ける傭兵だった。

『表』では強盗騎士・山賊・野盗を狩る、つまり悪人退治などを主に引き受けた。

『裏』、とはつまるところ魔法関連だ。

魔法関連の荒事といえば化物狩り、もしくは『悪の』魔法使い討伐。そして士郎は『裏』の仕事の利益率が非常に高い。

彼は対化物・対魔法使いに関してはこの時代で最強に近い使い手である。

最も大きな理由として、彼の固有結界の装備の充実がある。

この並行世界に遠坂・凜の手で飛ばされる時、アヴァロンと一緒に飲まされた宝石があった。

その宝石は魔力の溜まったルビーだったのだが、嚥下すると同時に、武器情報が大量に流れ込んだのだ。

これは非常に予想外なことだった。

全く都合のいいことに、その中には対魔術 否、此处では魔法か 宝具、対魔獣とも言える宝具も含まれていた。

それで仕事の遂行自体はそれで非常に捗るわけだ。

さらに投影によって準備するという方法上、その装備の準備費用が
ゼロ。

0000000000!!!

ヒッハア！

?DXGOOOOOOOOLD!!!!

士郎自身も仕事に熱心な人間なので、受ける・こなす依頼も増え、

一財産、とまで言えるほどの蓄えはあった。
それに、彼自身は無欲だ。

亡き養父の遺産にあまり手を付けず、高校生の頃からバイトで生活費を賄っていた時の癖だろう。

彼の楽しめる娯楽も無いため、必要なのは食費のみだった。

その食費すらも質素な食事のため、そこまでかからない。

パリ北東の森の中で、エヴァに差し出したような食料で毎日過ごしていたのだ。

それに加えて野菜もあるが。

そして、彼の数少ない趣味である料理をする機会は残念ながら無かった。

話を土郎の持金のことに戻そう。

それでも長旅なのだ。

あまり無駄遣いをするわけには行かなかった。

そして金に困ったとしても、盗みなどは以ての外だ。

彼らの矜持に完全に反する。

ただ、土郎としては旅の同行人が居ることは嫌ではない。

むしろこの賑やかさは好ましかった。

懐かしいあの頃を思い出す、と言ったところだ。

支出はあの頃までに至らないだろうが。

現在、彼らはブリュッセル周辺。

もう一晩あれば到着、といった所だろうか。

ところでだ。

筈ですつと移動するならば、一日でブリュッセルに到着する？
それは否。それは間違いだ。少なくとも1500年代初期では。

この時期、魔法による飛行術はまだ完全には洗練されていない。2003年頃の飛行術よりは速度が出ない上に魔力消費も大きいのだ。

そして、人里の上空を行くためには高高度を飛行する必要がある。そうすれば確かに距離を徒歩より大きく稼げる。だが、それには問題がある。

マナとは大気に満ちる力だ。そして精霊の力である。

つまり、空気の薄く、精霊の存在の少ない場所では必然的に大気中のマナは少なくなる。

この場合は高高度上空がそれに該当する。

魔力効率・速度共に洗練されているとは言えないこの時代の飛行術人里の上を飛ぶことは出来ず、さらに、幾らエヴァンジェリンと言えどもマナの薄い高高度を長時間飛び続けることは相当の消費となる。

その上新しく増えた同行人が箒に同乗しているのだ。

そのため、箒は専ら通常の方法で通行不可能な場所を通る時に使用されていた。

此処はブリュッセルから南西の森。

やはり森は身を隠すのに適しているのだ。

彼らが寢床として選ぶのは必然だった。

本日も食事が始まる前と終わった後に魔法の練習が始まる。

今回も同様、二人と一体は森の少々深い中の少し開けた場所で座っている。

薪は集められており、既に消費が始まっている。

4月頃のブリュッセル周辺の最高気温は15 を下り、最低気温は5 に及ばない。

更に例によつて森の中である。
寒っ！

現在の時間帯はまだ日が沈んでいない頃、西の空が茜色になっている頃だ。

まだ最低にまで落ち込むことはないが、すでに肌寒い程に気温が低い。

「で、だ」

「・・・・・・はい」

「ケケケ」

一人の男が、ブロンドの美しい少女に睨まれていた。

「・・・・・・お前、基本魔法はどうした？」

「戦闘に必要ないかなー、と思つて無視してました・・・・・・」

「・・・・・・はあ」

一人のパツキン美ロリが、でかい男に対して溜息を吐いた。

「いいか？基本魔法は本当に『基本』だ。精霊に力を借りる行為の初歩の初歩だ。私達魔術師の出発点はそこだ」

「・・・・・・はい」

「まあお前は傭兵だ。いや、今や元、が付くな。兎も角必要なスキルだけを選んで習得する。これは戦闘者としては確かに正しい、が。」

一人の青年が、とある金髪美少女に怒鳴られる寸前だ。

「がだ！これから幻術を教えようというのに基本魔法から叩きこみ直すとはどういうことだ！」

「御主人、昨日一昨日ト同じ事言ッテテ飽キネーノナ」

「黙れチャチャゼロ！」

「ヘイヘイ」

ほー

へいへい

ポオオオオオオオウ！

ロリっ娘にロリコン怒鳴られた。

ざまあ。

夕べの食事はまだだ。

そんな雰囲気ではない。

「で、出来る基本的な魔法は、点火とその他4種類くらい……
・だったな」

「ああ、点火と発光、物体を動かす精霊、未来予測の精霊、ソレと
翻訳だけだ」

「本当に初歩の初歩の、しかもこれだけで他をよく覚えられたもの
だ……で、翻訳は傭兵業のためか」

「『あちら』がメインの傭兵だから転々としてたんで、翻訳はな。
無くても話せるには話せるんだが、それは俺のいた時代の言葉だし
……」

それと、『影』の倉庫は無理やり作ったからな……」

「時代変われば言葉も変わる……か。で、覚える順番が非
常におかしいんだが、まあこの際どうでもいい！

とりあえず、幻術を覚えるまでは私の持っている『コレ』も使うぞ
そう言つてエヴァは自分の『影』からとある球体を取り出す。

サイズは直径約30cm。

端から見れば、それはビンの中の箱庭。

中には海に浮かぶ島が入っている。

「ダイオラマ魔法球……だったか？超高級品だろう？」

士郎はその物体の特徴を聞いたことがあり、その名前に思い至った。

「これは私の自作だ。流石にこう転々としているとたまにはこういう物も欲しくなるんだ」

「自作って………凄いな、中に異界を内包しているわけだよな………」

自分の心がけつたいたいな事になっているコイツの方がそれはそれはもう、その………
バカだな！

「ああ、しかもこいつは時間差24倍。中で一昼夜過ごしても外では一時間と言ったところだ。まあ、中で一日経つまでは出られない仕様だが私達には関係ないだろう」

「どうせ不老不死だからな。じゃあ早速この中で修行するのか？」
「慌てるな。とりあえず、今晚はまだ使わない。幾ら私達が当面の危険を脱しているとは言え、余りに無防備だ。チャチャゼロを置いていつでも魔力を供給できん。そうだな………明日くらいには大きな街に着くはずだな？落ち着ける宿を見つけてそこで使おう」
「ああ、ハプスブルグ家領・ブリュッセルだ」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

彼らは一体何処へと歩く？

自由回答

A・前へ。時は無情にして無常である。
君の向いている方向へただ進め。

- - - - -
- - - - -

そして、その晩の魔法講座、食事が終わり就寝となった。

食事の内容は黒パン、豚肉の塩漬けのロースト（投影によって鉄串などを用意できたためそれで焼いた）

乾燥した豆類。それと少しの水。

豚肉の塩漬けは塩抜きをしていないので非常にくどい味だった。僅かな水では酷く喉が乾いてしまう、というのがやはり反省点だった。

今回もエヴァの布は3枚。

士郎も今回は2枚引つ張り出してくるまっていた。

幾らフランスから出たとは言え流石に見張りが必要だろう、ということとでチャチャゼロは寝ずの番をしている。

彼女はエヴァの『影』の中に入っていることも出来るのであまり問題はなかった。

神聖ローマ帝国。

その前身はフランク王国と言う、ドイツ・フランス・イタリア・ベネルクス3国を統一していたゲルマン系の国家だ。

そのフランク王国の王であり、ローマ教皇からローマ皇帝の帝冠を授かったのが、カール大帝である。

カール大帝の握った領地は、西は現在のフランス全土、東はボヘミア、北はネーデルラント、南はローマへと及ぶ。

全く以って広大である。

しかし887年以降。

王国は東・中・西と分割。

その間もなく中フランクは東西、イタリア王国に分割吸収されて消滅。

その後には王家の家系が消滅。フランク王国は消え去る。

西フランクは王家の家系消滅によって縁戚関係にあった他の家系が継承。

フランス王国となった。

そして最終的に神聖ローマ帝国となるのは東フランク王国である。

神聖ローマ帝国成立のきっかけはカール大帝のローマ皇帝戴冠。

東ローマ帝国の立場としては、「ローマ帝国の皇帝は一人だけである」、

つまり東ローマ帝国の皇帝こそがローマ帝国の皇帝である、という立場だったのだ。

実際の所、東ローマ帝国の見解としては、

「カール大帝はフランクの皇帝である。が、ローマ皇帝ではない」というものだった。

だが、カール大帝の皇帝即位には画期的な意味があった。

ヨーロッパに皇帝が二人、という状況は西ヨーロッパの景気付けに成った。

どういう事かというと、東ローマ帝国の力からの独立を、皇帝擁立ということを示したということだ。

そして、その160年後のオットー一世の戴冠によって所謂神聖ローマ帝国が成立することになる。

神聖ローマ帝国の名前は3度も変わっている。

最初はローマ帝国だったのが、神聖帝国、神聖ローマ帝国、ドイツ人の神聖ローマ帝国へ。

一度目の変更は11世紀、100年で再び、さらに100年でまた変わり、1512年に最終形に落ち着いた。

二人がフランスを出て入ったのは神聖ローマ帝国、もう数年で国号が変わる頃、と言った時であった。

その次の日の昼前に二人はブリュッセルに到着した。

「ここがブリュッセルか………！世界で最も美しい広場があるらしいな！」

とお上りさんなのはどちらか？

「シロウ、私も30年ほど前にここを拠点にしたこともあったが建物が随分増えているな！」

どちらもでした。

「二人トモガキカヨ」

一体冷めていました。

「……………まあ、まずは落ち着ける宿を探そうか」
「贅沢を言つつもりはないが、マシな宿で頼むぞ」

まずは宿探しである。

大きな街だけあって宿は少なくはない。

少なくともないのだが……

「……………」

「……………空室無し、か！」

「すまん……………」

「いや謝る必要はなくてだな」

人が多いということは利用者も多いということだ。

マシな宿を見つける頃には既に昼過ぎ。

宿から食事が出る時間も過ぎており、市場の露天で食事を探すことになった。

最も美しき広場の街・ブリュッセル 前編（後書き）

今回は説明ばかりです。

とりあえずそれなりの量が書けたので投稿です。

最も美しい広場の街・ブリュッセル 中編（前書き）

ミナサン、オヒサシブリデス

最も美しい広場の街・ブリュッセル 中編

ブリュッセル。

現ベルギーの首都である。

12世紀頃から交易・交通の中継点として重視され、手工業・商業が発展した町である。

ここで職人と商人は成長していき、貴族たちは要塞・城塞を築き、土地の所有権を宣言したりしていた。

そして、神聖ローマ帝国の一部であるブラバント公国領主の「お墨付き」を得ることで

14世紀前半から更に経済的に成長していくことになる。

14世紀後半では領主の宮殿が移されたり、1430年にはブルゴ―ニュ公国の支配下に置かれたり。

二人がこの街に訪れたころのブリュッセルはハプスブルグ家領。

ハプスブルグ家というのはカエサルの子孫を自称する貴族家系であり、結婚政策によって領土を拡大してきた一族である。

コレについてはまた後日。

ブリュッセルで最も有名なのはやはり、『グラン・プラス』。

簡単に言えば広場である。

だが広場と侮るなかれ。

どっかのおバカがこれを書いている2011年現在ではとくに世界遺産になっている。

『世界一美しい広場』として誉れ高い。

だがどっかのおバカは調べて初めて知った。

雑学もとい本当にムダな知識しか取り柄が無い癖に。

話を戻そう。

ブリュッセルの街並みの美しさは『小パリ』と称されるほどである。その中でも一際グラン・プラスが美しい、ということで登録されたのだとか。

さらにグラン・プラスの中で有名なのは

「……デカイな」

「ああ、久し振りに見たが……やはりデカイな」

市庁舎。50年強の年月を掛けて建造されたゴシック建築。高層建築である尖塔が、ブリュッセルの曇天を貫く。

「高さは大体……100ヤードと少して所か。んー……
・頂上の鐘堂には天使の像が据えられてるな」

100ヤードは大体93メートル。

ちなみに正確な市庁舎の高さは96mだ。

「ん……天使、か。此処は確か……ミカエルじゃなかったか？ここの守護天使らしい」

「成程。一番高いところから見守って貰うという構図にして加護を得たい、ってところか」

「それにしてもよく見えるものだな。人間の身体で」

「コイツは本当に何というか、才能なんだ。段々育ってきたのも確かなんだが」

「視力が育つ……？何だそれは」

「まあ、そのだな。俺の髪の毛と肌、今はこうだけとき、『昔』と違っただろ？その過程で目も段々魔術的に改造してたりとかだな。俺

アーチャー
は弓使いだからな」

士郎の眼は元々非常に優れた視力を誇っていた。
倫敦へ遠坂・凜と共に魔術を学んでいた頃、『この後』の為に眼を
魔術で改造していた。

その結果として、聖杯戦争当時のアーチャーのパラメータに及ぶ程
の視力を手に入れた。

つまり、4 km先の橋のタイルが見えるというアレを再現することが
可能だ。

「……………そう言えば、確かに弓使いだったな。私を助けた
時は弓を使っていたな」

「自分で言うのも何だけど、アレだけは俺の『最強』だよ。それ以
外は……………二流だけだな」

士郎唯一の『超一流』、それが弓射である。
百発百中の神業。

それ以外は二流だ、と自分を笑う表情に暗い色はない。ただ、どう
しようもないことだ、と諦めている。

「まあ、空中で矢を番えて3点を完璧に狙い打って磔を解くなどと
いう離れ業、絶技以外の何でもないな。

あんなモノを見たのは生まれて初めてだ。現在、この欧州でお前が
最高の弓取りだろうな」

実際、溜め撃ちしただけで矢をマッハ11ズドン出来る人間なんぞ
居ない。

既に『この士郎』も可能なことだが、魔法も併用すれば、矢と弓が
耐えられる限りは更に威力は上がるだろう。

「そう言えば、この建物。左右対称じゃないな、よく見ると」
「ああ、そう言えばそうだな。形はほぼ同じなんだがな」

左右対称であれば、尖塔に対して線対称の形のはずなのだが、この建物。

正面から対して見ると、左半の方が1・5倍強ほど大きいのだ。
無論、高さは同じなので、横幅が大きいということになる。

「何でなんだろうな」

「知らん。まあ、どうでもいいことだがな。それにしてもまあ・・・
・・・荘厳なものだ」

同時に建てられたわけではないから、というのが通説であり、恐らく正しいと言われている。

伝説として、設計ミスに気づいた建築家が塔の頂上から身投げした、
と言う話があるのだが、こちらは作り話である。

「それより、食事だが・・・・・・露店で食べられるものなんてた
かが知れてると思うぞ？」

「それは仕方ないだろう。取り敢えず行こう」

二人は市庁舎の前を離れ、食事を探しに行く。

「うーん・・・・・・やっぱりパンを買いに行こうか。食料も補給
しておいたほうがいいしな」

「宿も取れたし魔法球が使えるからな。その分大量に買う必要がある
が、金は大丈夫か？」

「ああ、それは心配ないよ。蓄えは十分にある。無駄遣いできるほ
どではないけどな」

結局それ以外に目ばしい物が無かったため、パンを買いに行くことになる。

今日は4月の半ばだ。もう少し前であればムール貝が食べられたのだが、このことは二人とも残念に思っている。

ベルギーといえばムール貝なのだ。

ちなみに、この時代に於いてのパンの消費量は一人あたり約1kg、ヨーロッパ全域でこの値に近似である。

ここで、ギルドとパンの関係について説明せねばなるまい。

ブリュッセルの誇る広場、『グラン・プラス』。

ここにはギルドハウスが何棟も建っている。

元々ブリュッセルという都市そのものが交易・手工業で栄えた都市であり、この都市にギルドが多く集まるのは必然である。

ギルドというものは、商人の手によるものが先に出来ていた。都市の運営に貢献したとされる、遠方の大聖人が組織したものである。

これらが都市の政治を独占していたわけなのだが、それに対して反発が起こるのは当然である。

では、何者が反発したのか？

手工業者だ。

彼らは職業ごとにギルドを結成、市政への参加を要求した。

この両集団の闘争はツunft闘争と称されている。

尚、この後彼らの要求は叶い、手工業者達も市政へ参加していくことになる。

だが、ギルドに参加できるのは徒弟制度に於ける親方のみであった。その下につく職人・徒弟は参加できない。

ギルドの役目は多々ある。

製品の品質維持を第一目的とし、ギルド内では規格と価格が定められた。

このことで起きるのは自由競争の排除。

同一規格・同一品質・同一価格。

これでは競争の起きるはずもない。

ギルド構成員は共存共栄が可能であつたし、市場への供給も安定した。

だが、これを良しとしない考え方もある。

自由競争がない、というのは良くも悪くもあるのだ。

各個人の自由な経済活動を阻害している。

安土桃山時代の日本でも同様の事態が起きていた。

それに対する一つの回答が、『楽市楽座』。

簡単にいえばギルド解体である。

これにより自由競争を誘導、商人を城下に集めるという意図があつた。

もちろん欠点も有つたが、確かにこれは画期的ではあつた。

次はパンだ。

先述した通り、パンというものはヨーロッパ全域で重要な食物であつた。

パン職人ギルドもギルド黎明期のうちに成立していた。

それに伴い、値段を安定させるための法律も施行された。

パンの供給を安定させるため、パン職人を牽制するためだろう。

ギルドは価格を据え置く。それを高く据え置かれては困る。

二人がやってきたのはとあるパン屋だ。

この時代のパン屋は窓口が販売所となっている。

せり出した台の上に、サンプルのごとくパンが乗っているのだ。

フード付きのくすんだ白の外套を纏ったブロンドの女と肌の黒い男がそこにやって来た。

男は大きな袋を2つも携えている。

店番の丁稚は考察を始める。

……旅人かな？ いや、でもこの袋だと……旅の商人かな？ 荷物が大きいからきつと馬車でも使ってるのかな。流石に歩きの旅ではこれを持ち運ぶだけで相当だからなあ。

その袋はそれほどまでに大きいのだ。

例を挙げてサイズを問うと、丸々と太った豚が入ってまだ余りが有る程なのだ。

……一体どこまで行く人達なんだろう。

まあ、いいや。どうせ今日も明日も店番の生活なものな。

男がやってくる。

そして、窓口の直径8インチほどのパンを指さし、

「すまない、この大きさのパンを5ダース貰えないだろうか」

「!?!?!?!? はい!」

……袋からもう分かってたことだけど、5ダースか……!!

他の人に売れなくなる程に買う人だな……！

「……ちよつと待ってください、少し多すぎるので親方に聞いてきます」

「ああ、構わない」

そう言つて少年は窓口を離れ、親方を呼ぶ。
親方こそが、このパン屋の主だ。

是非を問わねばなるまい、と少年は考えた。

「親方！馬鹿買いの男が！」

「40秒待ちな！」

親方の自問が始まる。

商いの魂、職人の心意気が自己を映す合わせ鏡に映る。
どちらが真の姿なのか、この男は測りかねている。

……今日の分は既に4分の3を焼き終わっている。
朝に二回、昼に二回。

先ほど昼の第一回が終わったところだ。
品物はある。

この客には焼きたてを提供できるだろう。

しかし、どうなのだ、と親方は更に考える。

……我々パン職人の本懐は、「多くの人々」にパンを提供することだ。

出来るなら、ウチのパンを食べてもらいたい。

この男は、焼きたてのパンを全て売ってやれるほどの男なのか？

この焼きたてを食べるはずだった十数人の人間に匹敵する一人なのか？

確かに、商売上非常に旨い話ではある。

所謂大口の注文だ。

そこでだ。

自分はパン職人だろうか、商売人だろうか？

・・・・・・これを、この男に問うとしよう！

親方は3枚目の鏡の前に立つ。

その奇妙な男こそ、自分の姿を真に映すに違いあるまい、と。

最も美しい広場の街・ブリュッセル 中編（後書き）

何だこのドラマ。

プロットに無いぞ・・・！？

パンのサイズを10インチから8インチに修正しました。

理由は「デカすぎね？」という単純なものです。

実際こんな小さなサイズだったか分ければまた修正するかも知れません。

最も美しい広場の街・ブリュッセル 後編予告（前書き）

今回は長くかかるはずなので、予告でw k t kしていただければ、
と思います。

傍迷惑かも知れないので一応予告、という形で置きます。

最も美しい広場の街・ブリュッセル 後編予告

男と親方が向かい合う。

最初の言葉は親方から放たれた。

「
いらっしやい」

言葉は威圧だ。

仮にも親方だ。

数々の徒弟・職人を束ねるこのパン屋の長である。

威なきリーダーは抱える手も、短く、細く、弱い。

この親方はその真逆とも言えるだろう。

「済まないな、このサイズのパンを
5ダース買いたい」

笑顔は威圧だ。

やはりこの男は戦人。

生において不敗を誇る剣の丘の主である。

力なき信念、信念なき力、この男が持つものはそうではない。

信念を以って振るわれる力、得難いそれを持つ。

交渉が、始まった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

生きることと信念を通すこと

どちらが大事？

前者／後者

A・お前の生き方に訊け。あるいは両方。

- - - - -

衛宮・士郎は大混乱していた。

……威圧してきたから威圧し返したけど何が起きてるんだ！？あれか！？買い占め止めろって！？

この男は戦人だ。

ポーカーフェイスを心得ていないはずがない。

そしてこの男。

混乱する頭の片隅で、すでに計算を始めていた。

「心眼：B」が火を噴く。

……しかし、この親方。こちらが別の店に行くと言っても止めるだろう。こんな空気だしな……！

どうしたものか、と男は勝算を練り始める。

そもそもまだ勝利条件すらはつきりしていないのだが。

やはり混乱していた。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルもまた混乱していた。

……何で闘争の空気なんだ！？パンだぞ！？されどパンだが、たかがパンだぞ！？

この魔女もまた100年を超える年の功を持つ。

当然その混乱をおくびにも出さない。

否、フードがそれを隠しているのも勘定に入れねばならない。

フードが無かったならば、彼女の混乱を悟る人間もいたかも知れない。

とは言え、悟れる人間が居たらソイツはきっと本人も知らないホクロを知っているに違いない。

……ここで1ダースか2ダースか買って他の店でもまた買えばいいんじゃないのか………？

この女は漢というものをまだ知らない。

あと、100年間きつとずっとヴァージン。

だが残念ながら、3人の中で一番冷静だったのは間違いなく彼女だ。

密かに混乱する二人に対称、親方は意気込んでいた。

……この男、
出来る！ならばきつと自分の問いに答えるだろう！

この親方、いかつい。

笑顔がどうしても怖くなる。

若いときはそうでもなかったのだが、半端に歳を取るとどうしてもそうなる。

ここ数年、髭面で通しているのも有るだろう。
だが、この髭も気に入っているのだ。

……この男………恐らく漢だ。流石に他の店に行くなどということはしないだろう！

やはりパン屋、職業上で人を見る回数が多い。
徒弟時代、職人時代、そして現在。
親方にまで上り詰めた人生経験はダテじゃない。

それと大きく外れてチャチャゼロ。
彼女はエヴァの影の中で既に起きていた。

……どうしてそういう空気になんだよ……こいつやっぱ馬
鹿なんじゃねえの？
出会う人間まで馬鹿ってスゲエな……
御主人もどっか馬鹿だし……

この人形、モノローグは片言ではない。
そしてこの人形、つまり人ではない。カウントは「一体」だ。

- - - - -
- - - - -

予習問題

一人のためのパンと、沢山の誰かのためのパン

どちらが尊い？

A・（解答せよ）

- - - - -
- - - - -

最も美しい広場の街・ブリュッセル 後編予告（後書き）

では、そのうちまた会いましょう！

最も美しい広場の街・ブリュッセル 後編（前書き）

最初の部分は予告と同じでいい。
ご了承ください。

最も美しい広場の街・ブリュッセル 後編

男と親方が向かい合う。

最初の言葉は親方から放たれた。

「
いらっしやい」

言葉は威圧だ。

仮にも親方だ。

数々の徒弟・職人を束ねるこのパン屋の長である。

威なきリーダーは抱える手も、短く、細く、弱い。

この親方はその真逆とも言えるだろう。

「済まないな、このサイズのパンを
5ダース買いたい」

笑顔は威圧だ。

やはりこの男は戦人。

生において不敗を誇る剣の丘の主である。

力なき信念、信念なき力、この男が持つものはそうではない。

信念を以って振るわれる力、得難いそれを持つ。

交渉が、始まった。

衛宮・士郎は大混乱していた。

……威圧してきたから威圧し返したけど何が起きてるんだ！？あれ
か！？買い占め止めろって！？

この男は戦人だ。

ポーカーフェイスを心得ていないはずがない。

そしてこの男。

混乱する頭の片隅で、すでに計算を始めていた。

「心眼：B」が火を噴く。

……しかし、この親方。こちらが別の店に行くとと言っても止めるだらう。こんな空気だしな……！！

どうしたものか、と男は勝算を練り始める。

そもそもまだ勝利条件すらはつきりしていないのだが。
やはり混乱していた。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルもまた混乱していた。

……何で闘争の空気なんだ！？パンだぞ！？されどパンだが、たかがパンだぞ！？

この魔女もまた100年を超える年の功を持つ。

当然その混乱をおくびにも出さない。

否、フードがそれを隠しているのも勘定に入れねばならない。

フードが無かったならば、彼女の混乱を悟る人間もいたかも知れない。

とは言え、悟れる人間が居たらソイツはきっと本人も知らないホク口を知っているに違いない。

……ここで1ダースか2ダースか買って他の店でもまた買えばいいんじゃないのか……？

この女は漢というものをまだ知らない。

あと、100年間きつとずっとヴァージン。

だが残念ながら、3人の中で一番冷静だったのは間違いなく彼女だ。

密かに混乱する二人に対称、親方は意気込んでいた。

……この男、
出来る！ならばきつと自分の問いに答えるだろう！

この親方、いかつい。

笑顔がどうしても怖くなる。

若いときはそうでもなかったのだが、半端に歳を取るとどうしてもそうなる。

ここ数年、髭面で通しているのも有るだろう。

だが、この髭も気に入っているのだ。

……この男……恐らく漢だ。流石に他の店に行くなどということはしないだろう！

やはりパン屋、職業上で人を見る回数が多い。

徒弟時代、職人時代、そして現在。

親方にまで上り詰めた人生経験はダテじゃない。

それと大きく外れてチャチャゼロ。

彼女はエヴァの影の中で既に起きていた。

……どうしてそういう空気なんだよ……こいつやっぱ馬鹿なんじゃねえの？

出会う人間まで馬鹿ってスゲエな・・・・・・・・
御主人もどつか馬鹿だし・・・・・・・・

この人形、モノローグは片言ではない。

そしてこの人形、つまり人ではない。カウントは「一体」だ。

「まあ、話があるんでな。ちょっと、入ってきてくれんかね。入り口は案内するから」

「・・・・・・・・分かった」

親方が窓口を離れ、勝手口から士郎たちの元へ歩いてくる。

「では、ついて来てください」

士郎は頷く。

エヴァンジェリンは無表情。

二人は親方の後に続いて歩き、パン屋の中へ入る。

二人の旅人と親方はテーブルを椅子のある部屋に入る。

そして、周りに付いている徒弟が椅子を出し、二人に着席を促した。

3人が座り、テーブルを挟んで向かい合う。

「で、どういふことなんだろうか？」

フードを取った白髪黒肌の男が、親方に問いかける。

その表情は、険も笑もなく、穏やかであった。

それに対して親方は重々しい。

そして、二人を屋内に招いた理由を、本題を告げた。

「5ダース」

最初にそう告げて、一つのパンを取り出した。

「あんたらが5ダース欲しいのは、この形だな？」
そのパンのサイズは直径8インチのパン。
士郎が買い求めた種類のパンと同じ形だ。

「ああ、そうだが……それが？」

「4分の1。今日焼いたパンの4分の1。あんたが欲しい
と言っているパンは、そのくらいだ」

親方は事実を告げる。

この店では種類ごとに焼いている。
4回焼くが、それぞれ種類が違う。
サイズこそ違う。数も違う。だが、体積で考えれば確かに4分の1
だ。

「でだ。あんたが欲しいと言ったこのパン。 おい！持っ
て来い！」

親方が徒弟らに呼びかける。

そして徒弟が5人、取りに向かった。

「少し、待ってもらおう」

親方が言う。

士郎は無言で頷く。

空気を震わせるのは外の喧騒。

だが、この場所に満たされた雰囲気は、張り詰めて停滞。
何人たりとも乱すことは許されない。
停滞を進行に変えられるのは、この後に持ち込まれるモノだけ。

……何か偉く大事になって来たぞ！？

まだ混乱している衛宮・士郎。

……私の入る余地全く無しなんだが……！！？

同じくメダパニ、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。

チャチャゼロは寝ていた。

……やはり出来る！

更に燃える親方。

そろそろ混乱中の二人に気づいて欲しい。

……何これ。

部屋に一人だけ残った徒弟はそう思考する。
凄く居心地がアレだ、とも感じる部屋だ。自分のいる理由すらよく分らない。

……早く戻ってこないかなあ………！

それから2、3分経っただろうか。

あからさまに部屋に残っていた徒弟がホッとした顔を見せた。

5人の徒弟が戻ってきたからだ。

そして、その両手が支えるのは盥のような盆だ。

入っているのはパン。

士郎が指定した形のもので、未だ熱気を持っている。

「そう、あんたの欲しいと言った5ダース。ここに、確かにある。それも焼きたてだ」
親方が言葉を再度紡ぎ始める。
そして、言った。

「これで、全部だ」

士郎がそれを聞き、逆に問い返す。

「全部、とは？」

「うちでは一日に四回パンを焼く。種類ごとにな。で、このパンは先刻焼き上がったばかりだ。 どういうことか、分かるな」

……成程、俺が5ダース買えばだ。今日この形のパンを買える人間は居なくなる、か。

士郎は状況に漸く合点する。

この親方は、たった一人の客にこれ全てを売るといふのは意に沿わないという。

……人間を見る目と言うものが鍛えられている。
当然か、親方なんだ。

恐らく、40にも入らないくらいだろう。

だが、密度の濃い人生を送ってきたはずだ。

数々の嘘を見てきた。数多の真実を求めて手に入れた。

そして今、この男は存在しているのだろう。

ならば、嘘は通用しない。

否、不要だ。

言おう。正直に。

「なぜ、5ダースも買う？」

「今日はあと24食食べるからだ」

瞬間。

この空間は断絶され、建屋の外の喧騒は那由多よりも遠くへと消えた。

空気が凍り付いている。

どこから、ではない。

どこでも、である。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

補充兼予習問題

一人のためのパンと、沢山の誰かのためのパン

どちらが尊い？

A n s w e r r : 親方

- - - - -

この日取った宿では、2泊していく事を決めていた。

それは魔法球を使い、幻術魔法まで一気に習得していくためだ。

そのため、今晚は『7日分』入る予定ではあったのだが、

……馬鹿正直に言う奴が居るかあ ！

エヴァの混乱は怒りも混ざって極みに達した。
混乱度のランキングが変動する。

……いや流石に嘘の通じない相手だつてのは分かる！
だが此方の混乱に気付いていない以上、『私達の嘘』は通じるとい
うことは分かるだろう！

未だポーカーフェイスの二人。
だが、エヴァは心が大きく揺れた。そのため流石に気づかれるので
はないか、と彼女は危惧している。

親方はそんな彼女の心配を他所に、重々しく問いかける。

「 え？」

士郎が応える。

「 え？」

「……………」

「……………」

流れるのは沈黙。

過ぎ行くのは時間。

そして止まる状況と進まぬ問答。

……そんな雰囲気出して『え?』とか言われても空恐ろしいだけだ
というのに……………!

いや私は最強だから怖くないが!

怖くないったら怖くない、エヴァはそう考えながら場の推移を見守
ることにするのだが、

「……………」

「……………」

……早く何か話せ……………!

じれったい、と思いを募らせるのみだ。

……しまった、やっちゃまった……………!?

何かエヴァ怒ってるよ……………!

馬鹿正直に言うのはやっぱりアレだったか!?

そうか!?!俺に嘔吐きになれと!?

士郎の混乱の連鎖、螺旋は止まらない。
渦を巻くのは目と状況悪化。

親方が再び話し始める。

「マジ？」

それは確認の問いかけだった。

眼は見開かれ、怪訝さを見て取らせる。

だが、この男の直観は『嘘ではない』と既に判断を下している。
だからこそ、いやしかし、の確認だ。

……『嘘びょーんキャハハフヒヒ』とか言ったらどうなる！？

『心眼（真）：B』よ！今こそ俺に絶対の未来予測を……………！

常識的な予測で以てしても、そんなことを言えば雰囲気が最悪まで
落ち込むのは自明である。

この男、そろそろ落ち着けないのだろうか。

……此処まで来たなら嘘は不要……………！

決意し、話す。

「ああ、実は 俺達は超大食いなんだ」

「 うわ、あんた凄いな」

一瞬の後、親方が返す。

本当に不思議なものを見た、と言う顔で。

親方は大物というより天然だった。

屁理屈で言えば嘘ではない。現実時間に換算すれば、一時間に三食である。

どんな大食いなのかと。

ちなみに、暴食とは大罪である。

「まあ、あんたらが大食いなのは分かった。それは分かった。だが、それだけで売ると決めるつもりはない。

もちろん、このまま他の店に逃すつもりはない」

親方の眼光の属性が変わる。

天然さんから大物さんへ。

「で、だ。おたくら 只者じゃないな？それくらいは分かる」
ブリュッセルは大都市だ。

やはりカタギ以外の人間と出会う機会も全くないわけではない。

士郎は自身の素性を一部明かす。
嘘ではないが、全てでもない。

「……傭兵、だ。元がつくけどな。今はこの女性の護衛として雇われてる、ってとこだ」

その答えに、親方はふむ、と一息を付く。

そして、もう一つ質問を投げかける。

「差し出がましい問いかけではあるんだが、何故、傭兵に？」

「正義の味方、ってのに憧れたんだ。自分の力で、多くの人
いや、皆を救えたら 違う、皆を救うんだ、って。そう思っ

た」

「その理想は何処から来た？」

「親父の叶えられなかった夢を、カタチにしたい。そこからだ」

「アンタ、誰かを救えた実感はあるか？」

そこで、元傭兵は黙り込んだ。

ある。そうだ。あるはずなのだ。

だが、そう言い切れない。

自分が追われた理由を考えればそうだ。

救ったはずの人から恨まれる。それは救えたと言えるのだろうか。

「……………ないのか」

その反応に、親方はがっかりしたような顔でそう漏らした。

「……………少し、俺の話をしようか。構わないか？」

彼がそう言つと、目の前の男は神妙な面持ちで頷いた。

「俺の始まりは、やはりこの街のパンだ」

思い浮かべるのは子供の頃の自分だ。

……やんちゃなガキだったが、妙なところで素直な所があったかなあ。

「美味しい、と素直に思っ、そしてそれを作る人が眩しく見えて、そこからだ」

いつも家のパンを買いに行くのは自分の役目だった。いの一、番にパンを食べられる、という理由もあつたのだが、

……たまに窓から調理場を覗いてたんだよな。

その光景の中には、当然パン職人の姿があつた。

自身の年の頃は9歳頃、その職人は当時おそらく20代後半だった。

……汗水垂らして、太い腕で力強く生地を捏ねててな。あれを見てて何だかなあ、格好良く見えただよな。

子供の憧れなどそんなものである。

これを書いているドアホも作業服に憧れたクチだ。

「憧れを手に入れたい、と。誰かに美味しいと言わせたいと、誰かを食わせてやりたいと」

そこまで言っ、言葉を留めた。

そして、話しながら自分で気が付いた。

「いや、たつた一人の誰かの為に食わせてやりたいと思つた。パン職人さ。

俺達に喰わせてくれたパンを作つたその人だ。俺が窓越しに見たその人だ。……俺もアンタみたいになれたかな、って聞きたかつたからな」

そして願いを一つ手にして、彼はパン屋に奉公に出た。

最初は当然徒弟からだ。

徒弟とは徒弟制度に於ける最底辺だ。

親方の家に住み込んで雑用をこなし、その合間に親方の仕事を見習い、技術を磨く。

預り教育のようなものだ。徒弟の縁者がその教育費（これ以降は便宜上『学費』とする）を払う。

……あの時は無理言ったっけな。無理言ったつもりが結構喜んで拍子抜けだった覚えがあるけれどな……………！

徒弟の期間は2～4年。その間、縁者が学費を払うのだが、

……親不孝者にはなりたくなかったから、必死でやったなあ。

殴られることもあった。

だが褒められることもあった。

一喜一憂を繰り返し、だが精神も落ち着いてきた。

そして努力の甲斐あり、2年が経つ前に職人の仲間入りとなった。

つまり給料が出るようになり、家に金を落とすことが出来るようになってしまった。

今まで払ってもらっていた学費に報いる時が来たのだ。

初めての給料、自分という職人のパンを持って実家へ凱旋した覚えもある。

今日は実家に帰れ、と言われて金袋と自分で焼いたパンの入った袋を握らされた。

親方の粋な計らいだ。

……良い日だった。ここからだ、って気持ちも大きかった。

本当に、良い日だったと思う。

日々を回顧し、話の続きへ戻る。

自分の憧れた職人と肩を並べて仕事をした。

年季こそ違うが、対等な立場で話が出来るのが誇らしかった。
何より願ったことも叶った。

「それで、その人に食ってもらったよ。そしたら、
美味しい、ってさ」

憧れを、手にした。

自分にとっての信仰に報われたのだ。

「良かった、とも思ったし、やった、とも思った。それ以上に、あ
ったのが」

そして、新しい願いが生まれる。

「これを皆に食わせてやろう、美味しいと言ってくれるだろうか、い
やきつと美味いはずだ、ってな。そうやってやってきて今の俺が居
る。今や立派な親方だ」

話が終わった。

「こんなもん有りふれた話だ。ただ、俺が親方だ、ってだけのな」

笑ってそう言うと、表情が再び真剣なものに変わる。
眼は睨むように、眼光は探りを隠さず。

「俺は只者ではないな、って聞いたがな。傭兵であることを勘定に入れたとしても、やはりアンタは只者ではないと思うわけなんだが」

ため息と共に、表情が何処か憐れみを帯びる。

目の前の男の抱える何かに、不条理を感じているのだ。

「何故、なんだろうな？アンタが満たされないのは、何故なんだろうな？」

エヴァンジェリンは思考する。

既に冷静だ。話が真面目な方向に向かった結果だ。

……私を救ったとき、コイツはどんな顔をしていたかな。

エヴァの思索は先ずそこへと向かう。

あの時は何が何だか分からないまま助け出された。混乱していたわけ、救けたその瞬間の顔を目にする事が出来たかも覚えていない。

あんなにも鮮烈だったはずなのだが、情けないことによく覚えていなかった。

……あの養父のような顔か？それとも、何だ。 何も無かったのか。

それならば齒痒い、と彼女は思う。

彼女は善人としての思考回路も持っている。

当然だ。誇り高き悪人だ。

悪が悪である理由を知ることが、善が善である理由を知ることと同じだ。

彼女は悪を自認し自称する。他によつて悪と認識され他称される。
彼女は善の下に自己を否定し、悪の下に肯定する。

……この男は善人だ。

人を救うことで幸せになれる、幸福な人間のはずだ。
自らの本質を、本分を、本望を果たしているのだから。

壊れている、と言うことを勘定に入れたとしても。

それは報われるべきだ。

なのに、何故満たされない？救われない？

この男は何故幸せになれない？

納得が行かない。

悪を打ち倒すならばそれは善だ。この男は善なのだ。
ならば何故善であることを喜べない？

何故、が駆け巡る脳内。

だが、彼女は既に知っている。

知っているが気付かない。

……違う。

そうじゃないんだ。

この男は、自分を善と断言しない。

『正義の味方になりたい』とは言ったが。

しかし、それでも気付いては居るだろう。

凡そ全ては等しく正義であり、悪であることぐらい。

私が言う又何と云うか、自己弁護のようで言い難いが。

だが、ここで彼女は『士郎についての』思索を止めた。

彼女は彼女自身を振り返る。

……ならば、何故私はこの人間を理解出来ないのか。

幸福にならないこの男の、その理由を。
それを諦めていた、私は。

エヴァンジェリンは、自分が幸福を望むことを認めた。

……私は今、幸福……なのだろうか。
自分を肯定する人間が傍に居る。居てくれる。
うん、それはきつと幸福だ。

エヴァンジェリンは、自分が幸福であると認めた。

……隣の男の事を理解したい、と思うのは。
幸福である証で、贅沢なことなんだろう。

エヴァンジェリンは、他人を心配した。

……この幸福を運んできたのはこの男だ。
私の誇りに懸けて、報いたい。
違う。

私は、この男が報われるべきだと思う。

エヴァンジェリンは、この男の幸福を願った。

……例え、私がシロウに殺されるとしても。
文句など言わない。無抵抗でいるとも言わないが。死にたい迄では
ないし。

私は、悪だ。

それだけの理由（罪）があるのだから。

エヴァンジェリンは、この幸福を諦めても良い、と考えた。

望んで、そして手に入ったというのに。

裏切られて善い、自分が傷ついて善い、と考えた。

数日前はその事を恐れていたと言っのに。

……感傷だ。

こんなことを考えるなど、どうかしている、のか。

他人の事をここまで気に掛けるのは久し振りだからか。

エヴァンジェリンは自嘲した。

やはり、自分に幸福などは不釣り合いだ、と。

この男には悪いが、お前は自分なんかを救えなければ良かったのだ、と。

それでは、この男と同じだと言っのに。

幸福とは、罪なりしか？

チャチャゼロは何となく起きていた。

主人の悩みを感じた、というのは嘘だろう。

彼女はきつとそんな事は言わないし、事実だとしても言わないだろう。

……んな殊勝な従者でもねえしな。

今の状況が一番相応しい、と人形は考える。

……さてさて……どーよ、これ？

この従者、何だかんだ優秀である。

主人が悩んでいることにも気付いているし、悩みの内容も大体察しが付いている。

……懐かしいな、こんな御主人は。あれだ、感傷的になっちまってよー……何だよコレ……

こんな状態のエヴァは、人を殺す経験が浅かった頃、チャチャゼロを作った間もない頃以来だ。

……これまた面倒なことで悩んでやがるなあ。

『真祖の吸血鬼』エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル』の存在は害悪である。存在しているという認識はそのまま恐怖となる。誰かを幸せにしたければ、

……御主人、テメーは死ななきゃならねえ。悔しいことにな。

そして、幸せになるならに関わらず、生きたいと願うだけでも、

……御主人、テメーは殺さなきゃならなかった。悲しい事だがな。

それでも幸せになりたいと願うのならば、

……御主人、テメーは どうすればいい？

殺して殺してまた殺して、幸福な生のためには生きなきゃならねえのに、殺すから幸福にならねえ。

そろそろ、死に場所でも探すのか？

悩める人形は人知れず考える。

何だかんだで主人思いの良き従者だ。

結局彼女の結論は、

……生きてりゃ、いいことも有るさ。

現にこうなんだ、生きてて 良かったろ？

生きること自体にゃ、罪が有る訳ねーよな？

ただ、生きにくい身の上のせいだ。

そう考え、再び眠ることにした。

だが、眠る前に一つの考えが浮かんだ。

……この二人、微妙に似た者同士なんじゃねえかな……？

この沈黙は静の水盆。
次の言葉は波紋となる。

雫を落としたのは親方だった。

「・・・・・・・・俺だけ熱く語っちまってスマンな。 だが、
言わせてもらおう」

交渉の体を為しては居なかったが、親方はそのような形式で答えを返す。

「悪いが、売ることはできない。アンタはこれを全て売って良いと思わせる程の人間ではなかった、と謂わせてもらう」

そう言つて、土郎の注文を却下した。
しかし親方は、だが、と言葉を継ぐ。

「1ダースまでなら売ろう。あと、詫びだ。2つ無料で持っていけ。
昼、食べてないようだが 合ってるな？」

その好意ある行為に、土郎は眼を閉じ礼をする。

「・・・・・・・・忝い」

「いや、礼は要らんさ。こっちだってアンタの注文を却下したんだからな。どちらかというと俺が責められるべきなんだがな」

そう言つて親方は笑う。

申し訳ないな、と言葉を付け、パンを二つ掴んで目の前に並んだ二人にパンを手渡す。

2人は受け取ると、彼に黙礼した。

「で、1ダース。買っていくか？」

「・・・・・・ああ、よろしく頼む。この袋に詰めてくれ」

「相分かった。おい、コレに詰めとけ！1ダースだ！」

徒弟に袋を受け取らせ、その中に13個のパンを詰め込ませる。

『パン屋の1ダース』という言葉がある。

パンは当然ながら、焼きたての時間が一番大きく膨らんでいる。

その後は水分が抜けたり空気が抜けたりで小さく、軽くなっていく。その上、全て均等大きさで焼くなど非常に困難だ。

パン屋がパンを、重さを誤魔化して売るなどんでもない不届きである。

先述した理由で重さが変わった結果、『誤魔化しがあった』などと言われては溜まったものではない。

そこで、背に腹は変えられぬ、と上方に最初から積んでおくという方策を取った。

重さが記載量以下になるのが問題なのである。

つまり、最初から記載料より重くしておけば、例え時間の経過でパンが軽くなったとしても問題はないのだ。

そういうわけで、パン屋の1ダースは13、もしくは14を指すのである。

そして、二人は静かにパン屋を出た。

外は、雨が降っていた。

全てを曖昧に変えていく流れ。

パンを齧ると、ほのかに酸味がした。

- - - - -

A・物事には始まりがある。

始まりつてのは一番大事なんじゃないか。そう思う。

終わりというか、その先も大事だと思うし、そっちが一番尊いと思う人も居る筈だな。

やっぱり、始まりは一つのことからだと思うわけだしな。

だからこそ、俺はあの男が奇妙だと思う。

最初から全てを望んで、それで良く続くな、って。

満たされないのに、何でやってられるのか、って。

闇雲に進んで、幸せじゃなくて、何でそのままで居られるんだ、ってな。

最も美しい広場の街・ブリュッセル 後編（後書き）

少々待たせてこんな内容だよ！

ブリュッセルの夜・前編（前書き）

あんまり間をあけるのもアレだと思ったので、また分割で御座います。

ブリュッセルの夜・前編

その晩、パンを3つ持って、彼らは魔法球へ入った。

パン屋を出た後、結局4軒のパン屋を梯子することになった。
そして何とか5ダースのパンを用意することが出来、修行の体勢が
万全に整ったはずだったのだが、

……何というか、気まずいな。

この手の話は何というか、やはり苦手だな。

そう思考するのは衛宮・士郎。

彼は見えなくとも、一種の狂人である。

彼は自分自身を度外視する、つまり彼のスタンスとは『自分自身以外全ての味方』というものである。
当然他人になど理解されない。

……何度も言われたことではあるけど、やっぱりコレばかりは直らない、か。

自身も歪みを何処か自覚している。
だが、それを修正する気はない。

救済とは、贖いなりしか？

- - - - -
- - - - -
今回の纏め

パン屋でゴタゴタあって5ダース買うはずが1ダース
結局後4軒回って5ダースだヒヤッハ
あと昼飯は一軒目のパン屋さんがくれたありがとう

そして、自分が他人と比べて、
歪んでいることを否定できない。
その歪みを、優しさに哀れまれた。

だが、彼は根本的には気付けない。

<<エヴァンジェリン
お前のツレだろ、早くなんとかしろよ
- - - - -
- - - - -
- - - - -

衛宮・士郎の歪みはとある致命的な欠点を抱える。
人間として非常にマズイ所だ。

『人の心配を正しく一切受け取れない』所だ。
もうそれは酷いもので、例えるなら、
死亡フラグ満載な重症を負っていた所で身体を動かして更に立ち向
かうし、
軽傷な仲間の方を「動くな死ぬぞ莫迦！」と諭したりで。
そんな訳で、この男の行動は馬鹿げているのだ。
それ故に、この男が他人を心配しても『説得力がない』のだ。
だから違和感があり、理解が出来ず、その裏に何か恐ろしい物が有

るように見えてきてしまうのだ。

だがメタ的に言ってしまうえば、最も恐ろしいのはあらゆる死亡フラグを豪快に折って行くことなのだが。アヴァロンさんチーツス何時もご苦労さんツス。

疑心暗鬼とは恐ろしい。加速し、伝染し、発症すれば悍しい事態となる。

様相も惨憺たるものながら、その後も酷い。

ある人は後悔し、ある人は排されて当然と言って腕を組み、ある人はさらに暗鬼を心の中で育てる。

それら全てが、この男の敵だ。

後悔しても償わず、当然なのだからと無感情であり、疑心暗鬼はこの男の天敵である。

否、違う。

それら全てが、この男を『敵』とする。

それらの人々は救われていない。

救われるためには気付かなければならない。信じなければならぬ。

故に、衛宮・士郎は救われない。

救われるのが先か、救うのが先か。

前提の崩れたループは捻れ狂う。

歪んだ円環は本来の在り方を留めない。

彼は螺旋の最先端。

この世全ての悪を背負う者なり。

だから、彼は報われず。

しかし、彼は折れず。

そして、彼は何も得ることは無い。

遂には、彼は悲嘆の極みへ至るのだ。

とは言うものの、一つ言えることがある。

彼は『彼自身の正義』に殉ずることはない。

『所謂正義』というモノに殉ずるからこそ、それでも『正義』を名乗らないからこそ、『正義の味方』に最も近いのだろう。

だが、それは極僅かな例外を除いて最も多くの人間を敵とすることである。

尤も、彼は『彼自身の正義』を未だ持っていないからなのだが。

何にせよ、『彼』がもう一人の『アンリ・マユ』と成ったのは当然だった、ということだ。

『善』へと捧げられた生贄だ。善の為すただ一つの悪行だ。

少し肌寒い空気が世界に包まれている。

太陽が頂点に昇っている。

大体正午だ。

視線を下げれば、穏やかな水面に光が反射する様が見える。

ダイオラマ魔法球内。

湖に浮かぶ島の上。

大部分に平原が広がっており、所々で人影が見かけられる。しかしそれは人形だ。

エヴァンジェリンは卓越した人形遣いでもある。
ドールマスター

彼女の特筆すべきスキルの一つである。

島には平原だけではなく、森もある。

島の最大径は大体2 km程だ。

その中心にそここの規模で広がっている。

木の手入れをする人形もあり、管理された森であることが分かる。

湖岸から30 m程離れた所だ。

地面は草原が広がり、平地であるため適度に風が吹き快い。

その辺りに、家が建っていた。

藁葺きの屋根の石造建築だ。

煙の立ち上る煙突もある。

その家のリビングに、二人が居た。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。

衛宮・士郎。

『5日』が経過した。

基礎から集中して叩き直し、ボロボロながらも驚くべきスピードで
幻術魔法の修行まで辿り着いたのだが、

「……うーん……まあ、戦闘魔法は省いて来た訳なんだが」

呟いたのはエヴァンジェリンだ。

20代の女性の姿だ。

木床の上に質素な木製の4脚丸椅子が立っており、膝に両肘を付き、
手の甲で顔を支える姿勢で座っている。

今日の彼女の格好は浅葱色の着流しだ。帯は紺色である。

士郎の投影品であり、元は切嗣の着ていたものだ。

士郎の記憶の中で見た着流しに興味を持ち、着方はよく分からないものの、取り敢えず見て思った通りに着てみている。だから少し乱れてはいるが、概ね合っている、と言ったところである。

帯が後ろ腰に蝶蝶結びでリボンのように結ばれている。

火の爆ぜる音が暖炉から聞こえ、水盤の水のような静けさに、僅かな波紋を起こしている。

暖炉には火が入っている。

火をくべる従者人形も傍に控えており、森から調達した薪も十分数が準備されている。

従者人形は暖炉の右手5歩程の場所に立っている。

暖炉を横から見つめる形だ。その脇に薪が積み上げられている。

膝丈・袖の長いドレス、白い飾りのないシンプルなエプロン。

質素であり派手ではないが、清潔感があり『清浄』の言葉が似付かわしい。

エヴァンジェリンの視線は人形の方ではない。

低い姿勢のまま真っ直ぐに見ている。

そこには、外套を着た赤毛の少年がいた。

歳の頃は10を越えない程。

エヴァンジェリンも見た、過去の衛宮・士郎と寸分違わぬ姿だ。無論中身はあの男なのだが。

「お前の特異性を考えてみれば、確かに当然の結果とも言えるかもしれないな……見事なものだ」

「そうか……やっぱりか」

目の前の少年も、自分の特異性を自覚している。

幻術とはイメージの具現である。

エヴァンジェリンの今の姿も、彼女の成長した姿の『イメージ』に過ぎない。

故に士郎の強固なイメージ力は幻術において大きなアドバンテージとなる。

彼の投影を支えるのは構造把握能力だけではない。
幻想を支え続ける意志力とイメージ力もあるのだ。

エヴァンジェリンは少し、奇妙な事を考えついた。

……もしかすると……物にも化けられるんじゃないか？

いやいや、とその考えを収めるが、いやもしかすると、とまた飛び出してくる。

……まあ一度やらせてみればいいんじゃないか！？うん、別にいいだろ！

と考え至り、

「シロウ、取り敢えずそれを解け」

「ああ、分かった。ディスプレイサー・デイオー解除」

解除呪文と共に小さな爆発。

それと煙が起こる。

そして煙の後には、

……あれ？小さいのから大きいのになるから……？

そこには全裸があつた。

身の丈190cm近くある、鋼のように鍛えあげられた肉体だ。肌の色も黒い。それも相まって更に剛健さをイメージさせられるのだが、

「き」

……き？き がい？脈絡ない上にいきなりだな！？……いや待て、まだそう決まったわけじゃない。

一体何が言いたいのだろう、と考える衛宮・士郎。思索を巡らせてみるが、直ぐに答えは眼の前に降臨した。

「きゃ ああああああ！！」

次の瞬間、全裸が暖炉に叩き込まれた。

驚くことに、従者人形すら目を見張っていた。

急ぎ暖炉から士郎を引っ張り出し、消火のため凍結させた。すると出来上がったのは、

……ぜ、全裸のオブジェ……！やってしまった……！

顔を真っ赤にして全力で後悔するエヴァンジェリン。
とりあえず大きな布に従者人形に持ってこさせ、氷の柱に被せさせた。

そして、暖炉の傍に置いて自然解凍を待った。

しばらくして、氷が緩くなってくる。

内側から破ることも容易に成ってくる。

そういうわけで、士郎は氷を破る。

状態は布を被った全裸である。

そんな状況ではあったが、エヴァは言葉を紡ぎ始める。

「……………すまん！」

立ち上がっていた彼女に頭を下げられる。

確かにいきなり暖炉にブチ込まれるのは酷いと思うが、自分も油断があった。

そうだからいきなり全裸を晒すことになったのだから自分にも責任はある。

危機管理能力が下がっているな、と何となく考える。

だから、

「いや、俺も気が付くべきだったからあまり気にしないでいい。それより、何か他にあるか？」

いきなり幻術を解け、と言ってきたのだ。
何か問題があるのか、他の事をするのか。それくらい聞かねばなら

ない。

そう思考した。だから聞いた。

「ああ、えーとだな。もしかしたら、物体にも化けられるんじゃないか、と思ったんだ。もちろん私はやったことが無いけどな」

士郎は、成程、と思う。

自分の特性上、モノを作るのが得意中の得意だ。
ならば、イメージを現実上に結ぶ投影と幻術が無関係ではないのだから、

「剣、に化けてみる、ってどこか？」

「まあお前のしつくり来るモノに化けて見てくれるか？それが剣ならそれでいいんだが」

分かった、と返して内面に視点を持つていく。

自分の身を剣に変える。

正しく自分に変わるという工程だ。

・・・・自分のしつくり来るモノ、か。

内面から探す。

カリバーンではない。ゲイボルグでもない。あの大英雄の石剣でもない。

ならばあの双剣か。

否、自分の表現として適当なのは、

「多分、こんな感じじゃないだろうか」

士郎はそう言うと、幻術を開始させる。

イメージする。

無限の剣製の表現だ。

それが自分自身の表現とほぼ等号で並べられるはずだ。
では、どういう形だ。

……どのような剣をも内包する『モノ』。

剣は剣を内包し得るのか、と士郎は考えた。

だが、剣は改修・改造の余地こそあれど一つの終着点である。
かと言ってそこから形を変えることが出来ないのか。
そうではないのだが、

……そういうことじゃないんだ。全てであり、全てでない。
それが『無限の剣製』。そこには全てがあり、おそらく全てが存在
しない。

だから、士郎が選んだのは全ての始まりの形だった。

床に塊が生まれた。

そこには、インゴットがあつた。

錆びた鉄のような赤を基本に、不規則に色が変化している。
材質が何なのか、推して測ることは不可能。

端近くには、不自然な事に赤い硝子玉が埋め込まれている。
炎が網目のように奔っているが、温度は人の温度に近い。
当然ながら、そのインゴットは生きていた。

『これでいいか?』

インゴットから念話が聞こえる。

士郎の声だ。

発声する器官は金属塊に存在しない。故に声は空気を震わせるものではなく、意志に触れる形になる。

「ああ・・・・・・・・・・」

エヴァンジェリンはそう呻くように呟くと、歩み始める。
見下ろした目線の先のインゴットを手に取りうつとする。

・・・・・・・・剣では、無いんだな。

エヴァンジェリンはまずそう思った。

士郎の本質が『剣属性』というものと密接な関係があると考えていたからだ。

だから、こういうものにしろ剣を模ると推測していたが、

・・・・・・・・インゴットということは、剣の前段階？

士郎というモノの全貌を知らない彼女だ。

それだけの印象で終わるのは仕方がないことだ。

思考は手にとろうと地面に屈む動きの中の出来事だ。

右手を伸ばし、手に取る。

大きさは彼女の足の長さ程。幅は彼女の握りこぶし二つ半。
厚さは幅の三分の一ほど。

重さは、

・・・・・・・・見た目より重いな。

そもそも材質がどういう物なのか分からないのだから、外見から重さを推測するのも少し無理があるのだが、それにしても重い。

気になるのは重さだけではない。

一点異彩を放つ、硝子玉。

これは何なのだろう、と思索と共に覗き込む。

「何だ、これは」

その硝子玉は朱かった。

その中に映った風景が朱いからだ。

鮮やかではなく、やはり朱い錆色。

朱い大地が広がっていた。

そこには数多の剣が突き立っている。

・・・・・・魔法球を外側から見るのに似ているな。

世界を内包する魔法球。

それと類似するその硝子玉の正体こそ、

『俺の、心象風景だ』

・・・・・・え？

その男はその荒野の中に立っていた。

小さく見えるのは男の姿。

だが、視線を感じた。

恐らく相手もこちらの視線を感じているのだろう。

目が合った、のだと彼女は思う。

士郎の説明は続く。

『俺のいた世界では、極稀に俺みたいな奴がいる。自分固有の心象風景を持ち、尚且つそれを世界に「押し付ける」ことが可能な存在が』

聞く。

「・・・・・・つまり？」

『簡単に言えば、この異界を現実に存在させることが出来る。流石にそんな常識破り、時間制限はあるけどな。用語で言うならば、
リアルティ・マープル
固有結界”』

驚き呆れる。

だが、聞きたいのはそういう事じゃないかもしれない。
本当にその世界に立っているのか、ということか。
しかし、

「お前は、ここにいるのか？」

彼女は、何となくそう聞いた。

寂しそうにしているようには見えない。

だが寂しく見える彼が、どうしても可哀想に思えたからだ。

今ここに二人で居るはずなのに、どうしても遠く見えて悲しかった。

そして、その世界に至るまでの道程が気掛かりになった。

・・・・・・しかし、聞くだけでは不公平だ。

自分も見せなければ、釣り合わないだろう。

そう思って、インゴットに額を当てた。

「シロウ」

『・・・いきなりどうしたんだ？額くっ付けて
「今から私の過去を見せる」

恐らく理由を言つと断られる。
だから是非なく始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7189v/>

Fate/Distorted Destiny IN Magister Negi Magi 第一部らしいですよ？

2011年10月8日16時07分発行